

同人誌 あごら Agora 第1号

2024年7月7日 ヘルダーリン研究会発行

曼殊道 よだかの血潮
喉裂けて
なお歌い舞う 碧の白鳥

勝又公仁彦



目次

エントウシアスモス

小泉 友美

3

ヘルダーリン覚書(1)

江尻 潔

9

コーラとエン・ソーフ、混沌と自然

津城 寛文・匡徹

12

日常の神秘主義——空・仮・中の三諦を詠む日々

日守 麟伍(津城寛文)

22

ヘルダーリンとジュリアン・グラック

永井 敦子

29

十字架のヨハネのいくつかの詩の私訳(併びに付説)

鶴岡 賀雄

32

ヘルダーリンのギリシャ 鎌田東二のギリシャ 空海とヘルダーリン 鎌田 東二

59

カール・グスタフ・カールス『プシケ—魂の発展史のために』

深澤 英隆訳

68

表紙写真・短歌

勝又 公仁彦

編集後記

鶴岡賀雄・津城寛文・鎌田東二

付録「ロックンロール神話考」

執筆者紹介 奥付

エントウシアスモス

小泉友美

忘却の天蓋

琴の彷徨

盲目のキューピッド

渾沌の新生

老いても堂々とした幾本もの巨木が天上へとそびえ、その樹々の端は細かく掌のように裂けながら、この見事な天蓋を支えている。楕円形天蓋内部は、あまりにも複雑な立体形状となつて入り組み、小さな円や正三角形といった単純幾何学図形で渾然一体となり、希望、純粋性、栄光、希望の純白、創造性、魂の不死を示す青、紅、黄、黄金といったすべての色が上へ上へと昇りつめてゆく、この多彩で多様な徴は、柱のいたるところに彫られ、その記憶を留めるために。おどろおどろしい豪華絢爛の錯覚世界。血の凍った呼吸をすることなく、エネジイを取り戻したいかのように、その勇氣、その恥じらい、その熱氣に群れてゆく蜂の巣。花から花へと、密かに眠る黄金の蜜を探して、あちらこちらへと飛び交つてゆく。各柱を囲む雲がうねっては、天上から降りそそいで来る一筋の光は黄金の鎖であり、しだいに円く四方に広がって満ち溢れてゆく。中央のカップルドコラムに上から下へと、水の波紋が細かくさざめき、落ちてゆく。光の極みにおいての、まさしく光の中の光。究極の心奥底において揺らぎ、泳がせられる。純白の光に揺れ重なり合つて識られる、ハリエンジュの黄金の鋭いとげとげ、黄金

の木漏れ日を封じた樹脂の苦味は、悔い改めや苦悩といったところの腐敗を阻止するため。ぶんぶんと呻きたてる蜂と鳥の群れ、麗しいような女人の姿が蟹気楼のように薄く、濃く、点々が集められてゆき、ひとりきりの夢想の中、まるでこれから生を捨てゆく魂に気づかされるように。すでに体温を失ってしまった身体の口へと飛び入るこの蜂によって、まるで生の息吹を取り戻すかのように。目、鼻、口、耳のかたちはあまたの傷、皺に埋まり、呼吸の息でかすかに上下し、虚ろに見開かれたままのまなこ。足元には四つの朧げな、うねうねとした長いものの影、三本の尖った先端は湿った土に喰い込むままの影、乱雑な上下の菌型の影。怒り狂ったうながみの影。いずれも光なくどす黒いままに、呻き、吠えたてている。筋肉が劣ろえて、だらしなくさがった両腕に、力なく抱き抱えられたままの、遙か遠くから、今ここに駆け走ってくるものに、丸い純白の翼を刈りとられてしまう。勢いよく生えはじめた、青灰色のくるくるとして艶やかなその巻き毛は、踵に流れ落ちてゆくままに。押されて、倒れるままに、老いたその背中を飛び越えてゆく、小さな両踵に生えた翼。その斜めにかられた前髪を風に揺らすまま。

とらえられるのであれば、とらえてみよ、今、この瞬間に。

湧きあがるように、頭上には暗い炎を燃やして、星々の輝きは額に灯る。その陰鬱な示しは、背後に永遠に繰り広げられている太陽、水星、木星、金星の惑星群の運行によって、過去、現在、未来が表現される。細やかな時の刻みとともに、ゆっくりと萌えあがる緑の野は、すでに黄土色の衰えをみせて、あまたの透明な泡から生まれてゆく、小さなかたちの命は、口を開いて言葉を綴るもの、その真偽ははかりしれないでいる。生まれての若さはすでに老いをみせてゆく。深く、どこまでも暗い足元を濡らしてくる水色の氾濫に、不機嫌に眉根に深い皺を寄せながら、すでに痛めてしまった右足をひきずるままに。自由に身動きのとれないことの焦りと苛立ちを覚えて、内から湧いてくる赤黒い暴力と怒りは、竜巻きのように、ぐるぐると回転してゆくなかにその身を投じて

しまった。

シからシには、土星がめぐり、ドからドには月がめぐり、レからレには水星がめぐり、ミからミには金星がめぐり、ファからファには太陽が輝いている。これらの恒星は天の下にあってまた、天と異なる動きをみせて後退してゆくことの天の支配はまぬがれない。この長く繁栄を極めている城の塔に、微睡みから少しづつ覚めている老いの身体から皺が伸び、肌に弾力が溢れてきていた。光薄れる夕べとなり、夕陽の没んでゆく山脈の彼方から、半円の月の輝きのさしそめ、星々も波間に行き交えば、天上の輝きに映え、やがて星影の移るがままに、潮の流れも変わりゆき、考えてみればこのすべての惑星、太陽が軌道を進むにつれて、凄まじい音をたてて、進んでゆく。何気なくおかれた右掌から奏でられるのは、とても哀しげで重々しい音色で、星々の輪が波のように押し寄せつつ、横へと上下になめらかに動いてゆき、この音は作り出されて、かくしてまた、高い音が低い音というふうに混ぜられてゆき、まこと、これほどの勢いのある、あまた勢い打ち進められて、おのずと端なる音の一方が高ければ、もう一方は低きものとなって押し寄せてくる。右の掌の演奏によつて二本の弦はぶちんと音をたてて切れてしまい、傷から流れてくる真紅の血のほとばしりは、内面から湧きあがってくる、いのちをよみがえらせる。二つの掌を、表裏重ね合わせて演奏すると、さらに二本の弦がたちきれても、かつ、音色は止むことなく、四分の三の四度、三分の二の五度の音程、九分の八の音の天上の音楽は、上昇し下降が繰り返される音階で構成されてゆく。左掌のみの演奏は、薄紅色の湯気を発生させるまま、雲の形を彩どりながら、豊かな長い髪をたゆませる女性の姿を浮かびあがらせて、鳩と鷺が豎の両脇に育ち、月桂樹に留まって、その常緑の枝は永遠のいのちを約束する。両掌を手放して、琴が足元に落下してゆく時に奏でられるのは、哀しみのリディア調であり、お互いに矛盾して対立するあらゆる諸物は、あまりに雑然として、生と死、湿と暖が混淆融和して、相反撥するも協和して、窮玄なる美の調和が生起してゆく。何処までいったとして、如何なる途をたどったとしても、この音

階の限界に行きつけない。その道に果てしなく深く、落ちてゆくのみ。真つ二つに裂けた琴のかわりに、掌に落ちてきたのは、遠く波の穂を踏んで海を渡ってきた、非時の香の木の実。この陽光と豊穡の地に。暖かなオレンジ色は、二つの種子をはじけだして、二つの翼を背に生やした愛の天使は盲目のままこの世にこうして誕生した。乱れるままのくるくるの巻き毛の頭上には、真紅の血が滴るような薔薇の冠。目にも鮮やかな緑々とした庭で、今、誕生というまどろみから覚めた。片手には、真つ二つに見事に折れた琴が握られており、空いたもう一方の掌には二本の純白の矢を持ち、銅と象牙の矢先からは、薫り高い雫がしたたるままに。純白の矢は、美、簡潔さ、率直さ、同情心、真つ黒な矢は、醜さ、恥、絶望、奇妙さを表現している。美とは視線を通して生まれる光。愛は主張する。われは盲目なり。愛はおのれを盲目にする。布で覆われた両眼の外に透れない透きとおった瞳は、精神的な愛に通じ、その反対の肉体的な愛は品位をおとしめる。幾度も幾度も、その矢先を心臓に突き刺して、ついには奥へと突き通してしまった。一気に矢を引き抜くと、心臓もすべて一緒に外へと引き出されてしまい、前方から愛の矢から放たれた愛の炎によって全身は包まれて、炎上されてしまった。その苦痛はあまりに激しく、痛い。あまりの苦痛に大きな呻き声をあげてしまうと、なんとも甘美なカオスが広がってゆく。いつの間にか、二つに折れた琴は、見事に一つの曲線をなす弓を形どり、愛の矢が放たれて、見事な光の動きはすべての魂を燃えあがらせる。恍然たる美に包まれながら、愛の嘆きはいささかも消滅せずに、ますます燃えさかる焦燥感に駆られるのは、まさしく天上からの恩寵である。立ち並ぶ、一切の神像を潔く、捨てさって、後を決って振りかえらずに進んでゆけば、灰色の風は花々を咲かせる吐息となり、すべての万物がすくすくと育つ天上ゆく。この密やかな魂の堂奥においての、不思議な秘事が成立してゆくこと、調和は乱れに乱れて、人里離れた洞穴に滴り落ちるままの清水、鮮黄なる蜂蜜の甘さは無花果の甘き果汁に絡み合って、様々なる草花がその華を競い合って、芳しく立ち昇る香煙のけむる中、美にとり憑かれた。左奥の泉は、戦士した兵士たちの指から咲き誇るカー

ネシヨンの花、溺死したナルキッシスの紅い唇からは水仙の花、随分と後方には光輝く太陽神に憧れているクリ
ュティエが光輪に焦がされてゆく向日葵と、同じく、太陽神にあんなにも愛されて、嫉妬をかってその胸に矢を
放たれつ殺されたヒアキントスが、紫色のヒヤシンスとして咲き誇っている。花の女神フローラは春風ゼファに
抱かれて、満開の美女となり、その掌には、豊穣を象徴するオレンジがくるくるとまわっている。三人一組の恵
みの女神の円舞は、天から地、人間へと、そしてまた天へと還る愛の循環、美、愛と喜びがまたひと回りして、
円舞したことの証。受肉という恩恵の瞬間において、気高く均衡を保持して腰まわりを優雅にひねり、両掌を見
事に開いて美、愛と喜びの舞を踊る。衣を艶やかに彩どる花々は紅い薔薇、矢車草、紫色の堇、勢いよく放たれ
た日かの矢は、遠く、飛び散る火花を一気に目の前に咲かせてゆく。盲目のキューピッドは見えない目を大きく
開かせてゆき、煌々たる光の波に、いまや泳いでいる。光輝なる日光に照らされて、突如としてつくられたこの
太陽にまで登る道は、一本の太い垂直線によって表現されて、下から上へと登るこの光を凝視すること、いま
や両眼は損なわれてゆくまま。天空には、双頭白馬、二頭立ての馬車、無色、無形、不可触の天外へと、天の彼
方なるこの場所。少しづつ、すべての形が崩れてゆき、雑然と無差別に、相反発していたものは協和し、異なる
種から万物が相剋から生まれてゆく。魂はすべて顔となり、すべて目となり、すべて唇、そして大きな一つの掌。
まったく自分を忘れて、はじめて声を聴いた時に、その場に引き合わされて、また強く引き離された人々は、次々
に涙を流している。わたし達の想い、情感、感覚、哀しみ、喜び、痛みのすべては、ばらばらなものが一つの形
をつくってゆき、結局は最後に分裂してゆく。鷹の翼は折れたまま、その鋭い嘴で土をほじくる返し、蝙蝠、鴉、
蜻蛉、蜉蝣、蝶は、山川草木の全宇宙を鳴り響かせる永遠の調和の内に、天上から澄んでいる気が戻り、凝った
地は濁っている気として浮上する。無骨な野生、いままで圧されていたものの明るみ、大地の紛糾が、裂けた深
淵に共存してゆき、あらかじめ自らを開きつつ、一切を呑み込んでゆくとこの開かれたもの。真っ白な五弁の

銀梅花はすべての中央にあつて、月桂樹はこの混沌において、声をあげずに語りかけてくる。気がつく、老人はまどろみから若がえり、腕に抱えている琴は美しい女として変化している。愛の矢が心に刺さったままの女は、過去に七人の夫に嫁いだが、その度、魂を奪われてしまった。そして心に深い哀しみを覚えて、嘆きに嘆いて悲しみながらも、その嘆きの痛みに身を任せるままに、再び、深い眠りに落ちていった。この美しい女を両腕にかき寄せて、蔦葛を髪に飾って、馬に乗って駆け出していたのである。

わたしに何の喜びがありましょうか。わたしは目が見えず、天の光を見ることができないのです。生きていても、もう死人の世界にいるようなものです。思い出すこともできません。人の声は聞こえますが、姿は見えません。その声も誰のものかもわかりません。どこか遠くに行かなくてはならないと思うのですが、其処がどこなのかもわかりません。どうぞ、私を連れて道案内をしていただけませんか。

すべての音階、すべての詩、すべての声が響き合つて、訪れるのは、あんなにも傷ついた茨の冠であり、一、全がようやく祭礼して成り立つなか、老人も、愛の天使も、麗しい女、白馬も琴も、声をあげて集まつてくる群衆の影も、次々に靈感を受けて、涙を流している。すべての想い、心、感覚、哀しみ、痛み、喜びというばらばらなものから一つの形となつてゆく、もう振り返ることも、凝視することも出来ないような強い衝撃の中で、まったく目の見えなくなつた瞬間に、なんと畏れおおい聖なる受肉が、こうして一勢に口にするので、おこなわれているという神秘。食されることで、口から入つた糧は、吐き出される息としてのちをつないでゆく。すべてが充たされるこの新生には、一切の対立は無く、ただ充溢されてゆくのみか、否か。

ヘルダリン覚書(1)

江尻 潔

神は近くにあつて捉えがたい。しかし、危険のあるところ、救いの力もまた育つ。(「バトモス」)

ヘルダリンは神を捉えることが危険であることを知っていた。しかし、同時に「救いの力」も育つことも知っている。神の力は強くとても人の手に負えない。神は雷として到来する。それが神からの「しるし」(合図)なのだ。さらにそこには「怒り」も込められている。『しるし』が地に訪れたのに、しだいにそれが人々に見失われ、忘れ去られてしまった」ことに対して「神の怒りは燃え上がる」(「唯一者」第二稿)。さらに神の怒りは「限度を超えて 人間の手が生命に 挑戦」し、「神的な意志を 人間のたくらみが破っているため」(同前)いや増す。まず神の怒りを鎮めなくてはならない。歌にはそのはたらきがある。そもそも、「しるし」(合図)とは「天のことば」(「アルプスの麓で歌う」)であり、これを人が受け止めることにより、歌が、さらには言語が成就する。それを神は望んでいる。人が言語により歌うことを神は嘉みし給う。神は人に「ことば」を授けたいのだ。その意に応えるのが詩人である。

神の「しるし」はなにも雷ばかりではない。「天のことば」はさまざまである。そこには「太古のままに」語る「森のことば」もある。ヘルダリンはそれを「解き明かし 歌おうと思う」(「アルプスの麓で歌う」)。

だが、いったいどうやって「天のことば」を人のことばとして歌うことができるのか。「天のことば」は自然の響きであり、天に属している。それを死すべき者である詩人が言語として捉え、人間界にもたらす。ここには奇

跡的な技がはたらいっている。

1805年に成立したという「ピンドロス断片」の「海豚について」に関する注釈は、自然の「ことば」を、いかに人間の言語に変換するかというヘルダリンの思索を示唆している。以下長いが全文を引用する。

「海豚について」

それを、波なき海の深みで

笛の音が愛らしくうごかした

ムーサたちの日和、それは、花々のうえに、黄金なす花々の輝きのうえに、綿のような雲がかかるとき、自然の歌が響きわたる。生きとし生けるものは、己の音を、自身の信義を、おのおのの関連のあり方を告げる。そのあり方の違いのみが、そのとき自然における分離をもたらす。それゆえ、欲求の強調、あるいは別の面では言語でもなく、むしろ、すべては歌であり、純粋な声なのだ。波なき海こそ、敏捷な魚がトリトンの笛（法螺貝）の音を、成長の反響を、柔らかな海藻のなかで感じる場なのである。

ヘルダリンは「天のことば」を「自然の歌（声）」として捉える。「生きとし生けるものは自らの音を」発している。これは生の振動による響きである。命は絶えず震えている。それが、それぞれの響きとなって、「そのあり方の違い」となって表れる。それは「歌であり、純粋な声」なのである。私はここに「生きとし生けるもの、いずれか歌をよまざりける」という「古今和歌集仮名序」の世界観と同質の思考を読み取る。だから私はヘルダリンが好

きだ。

ただ注意しなくてはならないことは「天のことば」は「言語でもなく、むしろ、すべては歌であり、純粋な声」という指摘である。あたり前のことだが、人のことばではないのだ。これをいかにして人のことばに移し替えるか。ここで機能するのが「笛の音」である。笛はトリトンが奏するが、人もまた吹くことができる。「笛の音」は自然の「純粋な声」（ここでは「敏捷な魚の成長」）の「反響」なのだ。ここにおいて「天のことば」が、笛という人為の響きに、つまり人の「歌」に置き換えられる。笛の音を人の声と読み替えてもよい。自然の声が人の声としてこだまする。これこそ言語の初発のありさまなのである。

こうして「天のことば」が人に明け渡され「言語」となる。さらに、注意したいことは、そもそも言語の初発は会話や概念構築に終始する日常的なものではなかったことだ。あくまでも「詩のことば」なのである。つまり「天のことば」の響きと余韻をまとった「人のことば」なのである。これはとても重要なことだと思う。いかにして天の響きを人のことばに宿らせるか、天なるものはそれを望んでいる。だからこそ「救いの力」がはたらく。この力は神との「距離」として顕れる。かのもとの距離がなければ人はたちどころに狂気に陥る。言語はまさに距離を保つものなのだ。なぜならばそれは本質的には「反響」（エコー）だからだ。

※ヘルダーリンの詩の翻訳については手塚富雄、浅井真男訳『ヘルダーリン全集第二巻 詩Ⅱ』河出書房新社 1967年を参照しました。また、「ピンダロス断片」を翻訳するにあたり、武田竜也訳『ヘルダーリン『省察』論創社 2003年を参照しました。

コーラとエン・ソーフ、混沌と自然

津城 寛文・匡徹

根源語

タイトルの四つの根源語はどれも、その他の類語と同様、話者や文脈によって、濃淡の価値を担わされる言葉である。「ヘルダーリン」の名を冠した広場から、断片的に聞こえてくる言葉を、辻占のように切りとって、根源語の示すところを考えてみたい。

ヘルダーリンの詩『あたかも祭りの日の……』を論じたハイデッガーは、神々に先立つ「混沌」と「自然」を根源語として、神々は自然から生まれ、自然は混沌から生み出される、等々と繰り返し返している。

他方、ゲルシヨム・ショールームは、ユダヤ神秘主義を論じた大著において、人格的な「生きた神」であるヤーヴェと、有限な人間には思いも及ばない「隠れたる神（エン・ソーフ）」とを随所で対比し、あるところでは後者を、プラトンの「コーラ」と等置している。

プラトンの「コーラ」とユダヤ神秘主義の「エン・ソーフ」、ハイデッガーの「混沌」と「自然」を並べてみると、宇宙創造以前のなにかの「開示」の衝撃が、四つの根源語によって、さまざまに描写されている。

ハイデッガーやショールームとは、関心の焦点というか、方向が外れているジャック・デリダも、語りえないものとしての「コーラ」について、どう語りえないのか、いつものように、手を変え品を変えて語っている。

ハイデッガーの本領が哲学であり、ショールームの本領は宗教であつたのに対して、脱構築の旗手であつたデリダの本領は政治である。デリダがコーラに言及しつつ、中心部に遡及するよりは、そこから離れていくのは、コ

ーラは宇宙以前、世界以前、人間以前、人間が構築した社会集団以前、したがって政治以前だからである。「宗教」や「神秘」でも、教義や信仰、制度や建築など、歴史的に構築されたものは脱構築できるが、構築されていないものは、そもそも脱構築できない。

なお、マルティン・ブーバーの根源語、「我・汝」は、「生きた神」に引き寄せられ、したがって宇宙創造「以前」の「隠れた神」は焦点から外れ、敢えて宇宙創造「以後」の「人格的」「対話的」な属性が強調されたものである。「神は人格でもある」とは、その限定の宣言である。

ユダヤ神秘主義

有限な人間の射程を超えた領域・次元は、「永遠の哲学」的な神秘思想では、ギリシア思想では「イデア（のイデア）」、ユダヤ思想では「エン・ソーフ」（無限なもの）、のちのキリスト教用語では「隠れた神」、東洋思想では「無」「空」などと呼ばれた。この領域から元素・原理が「流出」「展開」してきて、「道」「法」「掟」にしたがって宇宙世界が形をとり、人間と接点をもってくるのも、公約数的な思想である。

ユダヤ神秘主義に特徴的なのは、このエン・ソーフが自己顕現し、宇宙に流出・展開し、さらに地上に反映・現象してくるプロセスのどこかにおいて、「ユダヤ民族」が重要な役割を担う、という図式である。「無限」「超越」である神と、有限の宇宙世界、その中の微小な人類、とくにユダヤ民族の歴史が、重ねて考えられるのは、有限なものが無限なものへ極大化されているとも、あるいは逆に、無限が有限に矮小化されている、とも言える。

シヨールームは、ユダヤ神秘主義を論じるに当たり、冒頭で、「既成宗教の一定の固着したかたちから一種の普遍的宗教へ」、いわば「化学的に純粋な神秘主義」の「一般的特質」を考えるとという試みに言及している。「しかし

……一般的抽象化にとどまることは実りがない」として、その試みはただちに却下される。ユダヤ神秘主義とは「一定の具体的な歴史現象の一総体」と考えるからである。「永遠の哲学」は、こうして固有名詞をもった哲学になる(シヨールム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985)。

シヨールムがユダヤ神秘主義を論じた大部のテクストから、華麗な衣装・意匠(ヘブライ語、西洋(古典)語の術語)を除去し、歴史的な展開やさまざまな人物・流派の差異も捨象して、遠目に見ると、私の目にはつぎのようなテーマが浮き彫りになってくる。単純化して、他界の極限である無、無からの創造、宇宙の領域、地上の歴史としてのユダヤ民族、の四つに分けて整理しよう。

一つめ。他界的なものの極限(と想定される)「無」「とらえがたきもの」「無限なもの」「エン・ソーフ」は、やむをえず神という言葉を用いれば「隠れた神」としか言えないものである。シヨールムはこれを、プラトンの「コーラ」と等値した。この「非人格的な根元という神智学的な設定」は、「聖書的神概念の人格主義的な基礎」を揺るがせる。じつさい、「隠れた神」と「生きた神」の二つの神観は、グノーシス派につながる「二元論的帰結」と、「両者の統一」として把握される立場とのあいだで、ずっと揺らいできた。

二つめ。二元論にせよ統一説にせよ、「隠れた神」が「生きた神」になるのは、「豊かな無」からの「創造」以後である。第一歩は、「神の潜勢力」が「無」から顕現する段階であり、新プラトン主義で有名な「流出」の象徴に言及される。「流出」は一般に、この宇宙存在に関してただ一度だけと考えられたり、創造後もつねに「干潮と満潮」「吸排気」のように相互作用するものと説かれたりする。ここまでは、究極を説く思想として、「永遠の哲学」に対応する。

三つめ。次の段階は、ユダヤ思想に特徴的な「神智学」で、「セフィロース」として説かれる。これは、「神から流出して神自身へ還流する十の段階」「領域」「数」「基本的属性」である。「流出左派」として、「聖ならざる」

セフィロースを説くグノーシス的な異端もあったが、主流はこれを「聖なる」「一個の神秘的有機体」とみなす。またユダヤ教における言葉、つまり「聖なる言語ヘブライ語」は、神の言葉として「神秘的な価値」をもつ「象徴体」であり、律法（ハラーハ）やトーラーの実行は「秘儀的行為」であるという。

四つめ。視野が宇宙全体から、地上の歴史に急速に絞られると、いわば起源神話の「歴史学」となり、そこではユダヤ民族が前景化する。神秘主義は「本性上……非社会的」でありながら、現実のユダヤ教・ユダヤ史のなかで「共同社会のための形成力」となってきた。「この歴史という問題」が、ユダヤという「特殊枠」の理解の礎石となり、あるいは躓きの石ともなる。

三つめの「神智学」と四つめの「歴史学」は、巧拙、精粗はあれ、ほとんどの神話にみられるもので、日本神話では、天御中主神から皇祖神、天孫降臨、神武東征あたりまで対応する。

ヘルダーリンの詩

ヘルダーリンの詩『あたかも祭りの日の……』は、ヨーロッパ思想や芸術の共通の土壌として、ユダヤ教、キリスト教、またギリシア神話が背景にある。この詩を中心に据えた、ハイデッガーのヘルダーリン論に、つぎのような表現が繰り返してくる。これを、プラトンの「コラ」あるいはユダヤ神秘主義の「エン・ソーフ」と重ねてみると、宇宙創造以前のなにものかが、「自然」「混沌」「深淵」等々という主語で指示され、その「裂開」と「開示」の衝撃が、さまざまに解釈されているものと読める（ハイデッガー『ヘルダーリンの詩の解明』『ハイデッガー選集3』理想社、1962 傍線は引用者）。

「自然は、不可思議に遍在せるものとして、予めすでにあらゆる現実的なものに明るみを贈るがゆえに、「諸々の時間」よりも時熟しており、その明るみの開かれたもののなかへと始めて現実的なものである一切が現われることができるのである。……自然はまた神々にも先んじている。……神々「を超えて」いる」(同書、89頁)

「ヘルダーリンはこの節でまた「混沌カオス」を「聖なる」と呼んでいる……聖なるものは自然の本質である」(同書、90頁)

「しかしながら自然は実に「聖なる混沌カオス」から生み出され」ている。……カオスとは先ず第一に巨大な口を開けているもの、裂けた深淵、予め自らを開きつつ一切を呑み込んでいるところの開かれたものを意味するのである。深淵は区別されたものや定礎されたもののためにあらゆる足場を拒む。……いかなるものもこの裂開に先行せず、たえずただそれに入り込むだけである。」(同書、95頁)

「遍在するもの」及び「一切を創るもの」は今や「一切をいのちあらしめる」自然といわれる。……しかし力は神々に由来するものではなく、神々がこれらの力によって存在する。」(同書、99頁)

そしてこれら、存在以前の、無限定の「自然」「混沌」「深淵」の描写や、有限な形や人格をもった「神々」の配置に続いて、「詩人(たち)」と「民族」「共同の精神」がつぎのように説かれるとき、無限と有限の接続が起ることになる。

「ただ詩人たちだけが遍在する自然によって軽やかに抱かれているときに、どのようにしてそれぞれ「民族」は聖なるものの現在に立たねばならないのであろうか。」(同書、99頁)

「ともに目覚める詩人たちにとって、原初的なものの豊かさは彼等の言葉に殆ど云うべからざる意味の充溢を贈る。……震撼が目覚める自然の最古の深みから出て来るゆえに、詩人たちはこの自然によって軽やかに抱かれているがゆえに……「目覚める自然」、「震撼」は現在している。……それは精神としてたえず「共同の精神」である。」（同書、101頁）

宗教思想として問題になるのは、無限なる神と有限なる神（々）の断絶／接統である。それは、シヨールムにおいては、エン・ソーフとヤーヴェの関係、ハイデッガーにおいては、「自然」「混沌」「深淵」と神々の関係がどのようなものか、という、神格論の課題になる。

他方、無限なる神と有限なる「民族」の直結、あるいは、限定された神（々）を介した間接の接統は、ハイデッガーにおいてもシヨールムにおいても、宗教とナシヨナリズムの関係、つまり広義の政教関係論になる。そしてこれが、政治を主戦場とするデリダの関心の焦点となる。

脱構築できないもの

デリダ晩年の『最後のユダヤ人』に収められた二つの講演は、彼自身のユダヤ的出自へのこだわり、つまり、「ユダヤ性ないしユダヤ教への帰属なき帰属」と、「ユダヤ的なもの」に「過剰に同一化すること」への警戒を主題としつつ、個人性と集団性、神の超越性と人格性、さらには、超越の極限としての無限的な「コーラ」にまで言及している。

「ユダヤ人であること」をめぐる、錯綜した、しかし率直な告白が、デリダのような人にとっても「挑戦」的な課題であったことは、「昨日もなお……」「脱構築」的な演説を行なうべきではないかと自問して「いた、と告白しているとおりである。しかし、「より好ましいと思われるのは、いつそう生の形で私自身を開陳すること」だと思いなおし、「脱構築」のすり替えを行わず、「最後のユダヤ人」というタイトルどおり、ユダヤ人としての自らの問題を、「生の形で」真正面から展開している（デリダ『最後のユダヤ人』未来社、2016）。

デリダは「神」と「ユダヤ」という、未だ「知るにいたっていない」二つの語のうち、「神」については「ここでは……直接語りなおすすめはしない」と脇におく。ことさらに断るまでもなく、「神」についてデリダは、「直接」には一言も語れないだろう。他方「ユダヤ」については、「どこで、いつ、どのようにして」自分に対して現われたか、学校での個人的な経験を語ったあと、ユダヤ民族の特性を、つぎのように論じる。

ユダヤ人には、「根源的に負債を負い、責任を担い、有罪である」という「普遍的な責任」と「その見張り番」としての「選びないし反「選び」がある。この、「ユダヤ人がユダヤ的であればあるほど……人間的な責任の普遍性をいっそう代表するようになる」という「範例主義」の選びの「誘惑」は、ユダヤ的ナシヨナリズムだけでなく、ナシヨナリズム一般にも作用している。ナシヨナリズムはすべて、「普遍主義的な範例主義への……歴史的な責任への使命」を要求してきたからである。

「ユダヤ人」（一般に特殊な差異をもった民族集団）であることと、「普遍的な構造をもった……人間存在」であることという、対立し連続し、相互浸透して語られるようなペア（その他）のあいだを行き来し、明示的な断りなしに文脈を転換するゆえに、随所で「脱構築」を起こしうる。そこでは、小さな共同体から国家や世界全体まで、さまざまな次元の「法」「掟」が交錯することになるし、そうしようと思えば、この世界以前、この宇宙以前、さらには存在そのものの以前までを射程に入れて、同様に論じることができる。

「この世界以前」「この宇宙以前」「存在そのもの以前」と私がいうのは、ユダヤ教・ユダヤ十二部族の始まりとなる「律法を与えられたという歴史……遺産」に関して、デリダが「コーラ」というギリシア語を用いて、つぎのように述べていることとかかわっている。この歴史的経験は、「掟と正義と法・権利の関係」について、「メシアニズムなきメシア性」について、「国民国家的市民権を超えた来るべき民主主義」について、そして何よりも「とりわけ、歴史に先立ちあらゆる人類－神－学的啓示の出来事に場を（与えることなく）与える場としてのコーラ」についての、「還元不可能な論理を構成している」という。ユダヤ的なものと異質に見える「コーラというギリシア語」が示すもの、「否定神学のさらに彼方で場を開く」というこの無人間的、無神学的な場」にこそ、「啓示や選びをめぐるあらゆる教義から解き放たれる条件がある」と同時に、「この解き放ちこそ、啓示ないし選びの内容そのもの」として解釈できる。それは、「ユダヤ人たちの神……この神は＜場＞でもある」からである、という。歴史以前、人間以前、神以前が射程に入ってきたうえで、かつ「ダヤ人たちの神……は＜場＞でもある」というとき、無限定のコーラは、ユダヤ的回路に縮減してしまうようである。

デリダはまた、『信と知——たんなる理性の限界における「宗教」の二源泉』（未来社、2016）において、カントの『たんなる理性の限界内における宗教』を材料に、宗教の起源を「限界」の外に問いつめようとした。そこでこの問いは、「一巻の＜旧約－新約聖書＞でもあるような一つの＜世界＞」は、「単なる理性」にとつて「一つの限界」なのか、あるいは「別の限界へと還元される可能性」があるのだろうか、というものである。

この難問を「最も抽象的な形式」で問いなおせば、対立するのは、「啓示＝開示可能性（Offenbarkeit）」は、啓示＝開示（Offenbarung）よりももっと根源的なものであり、それゆえすべて宗教というものから独立している」つまり「イデアとしての啓示」がある、という立場と、「信仰者や神学者ならばおそらくそう言うだろう」ように、「啓示＝開示」という出来事が「啓示可能性そのものを……啓示する」つまり「その点にこそ起源の場があ

る」という立場、この二つである。

デリダはさらに、「ある第三の場」に向かう。それは、「無秩序的≡非起源的」「砂漠のなかの砂漠」「極度の抽象作用」「religare（結びつけること、再び結ぶこと）」という「絆≡紐帯」よりも以前「原・始原的なものよりもさらにそれ以前のなにかでありえたかもしれない場」「人間同士の絆、あるいは人間と神の神性とのあいだの絆以前のこと」等々の「場」である。この「砂漠の抽象作用」とは、「そこから逃れているものいつさいに場を与え、生じさせる可能性」があり、その結果として、「起源の二重性」が生まれるものであり、これは一方で「メシア的なもの」と呼ばれ、他方で「コーラ」と呼ばれるものであるという。

「メシア的なもの」は「正義の到来」「他者による決定」としての「歴史を開く可能性」がある。こうした「メシア的なものの次元」「抽象的なメシア性」は、いかなる「メシア主義≡メシア待望思想」にも依存せず、いかなる「限定された啓示」にも先立ち、したがって当然「いかなるアブラハム由来の諸宗教」にも限定されない。こういう「砂漠のなかの砂漠の好運」は、伝統の根柢を抜き去り、無神学化し、抽象することによって、ある普遍的合理性を解放し、「宗教」について「合理的」な普遍的言述を行なうことを可能にしてくれる。これはシヨールムが比較宗教による「一般的抽象化」と呼んで批判した、通宗教的な次元の強調である。

「コーラ (Khôra)」という名については、そのような比較や抽象の手がかりすらない起源・源泉として、論じられる。プラトン『ティマイオス』のなかで言及されたコーラは、「場そのもの」「絶対的外在性の場」であり、「間隔化」を可能にすることであり、「間が開くこと」は「いかなる神学的、存在論的、人間学的審級によっても支配されてしまうことがなく、時代も歴史もない。むしろ「それらのプロセスすべては、コーラの抽象を前提」とする。コーラはなにものでもなく、存在者ではなく、現前するものでもなく、ダーザイン（現存在）がその不安のうちで、存在の問いへと開かれるようなく無くでもなく、「存在を超えた彼方」として告げることもできず、

プロセスすべてに対して「絶対に動かされないもの、異質なものの」のままとどまる、等々と敷衍される。

しかし他方で、この宗教の彼方を示す極限の議論が、デリダの本領である歴史や政治の卑近な課題に、直結される。「主権国家」「市民―主体」「公共空間と私的空間」などの地上的な概念は、ある一定の宗教的根元から派生したものを受け継いでいて、「私たちの民主主義の理念が、いまなお宗教的なものを伴っている」からである。

「宗教とは応答である」という命題について、「責任」応答」には「誓いによる信」がなければならず、この「宣誓した約束という企て」は、「神を証人に立てる」必要があるゆえに、「神」が「不在の現前……不在であるもの」として呼び出される」からである。

構築以前の世界

このような、人間によって呼び出される「不在の神」「投射されたもの」についてはどのようにでも語りえて、したがって、自他によって語られたことはどのようにでも脱構築できる。

しかし、「砂漠のなかの砂漠」や「コーラ」、「極度の抽象作用」や「原・始原的なものよりもさらにそれ以前のなにかでありえたかもしれない場」といった、もともと構築される以前のものについては、デリダのような脱構築主義者は、非・構築的に、引用を重ねるしかない。「コーラ」「エン・ソーフ」「混沌」「自然」といった根源語について、既述の言い回しを引用するだけという、二流の学者と同じような二番煎じしかできないのは、超一流をもって自任する人にとっては不格好なことである。せめて「最後の脱構築」を謙虚に告白して、遠い彼方の根源語の世界に憧れることくらいは、できたのではないだろうか。

すぐれた神秘家たちや詩人たち、その名に値する思想家たちは、そうしてきたのである。

1 芸術と宗教のあいだ

「歌道は即ち仏道」「和歌は即ち真言・ダラニ」などは、詩歌（＝芸術）（行為一般）と宗教の密接な関係を宣言したもので、唱えたのは、歌人にして仏僧の知識人たちであった。そのはっきりした自覚の発端となったのは、公家政治から武家政治への激動の時代を目撃した、最晩年の藤原俊成である。

式子内親王の求めに応じて著述された『古来風体抄』（1197初撰、1201再撰）は、冒頭で「和歌の起り」や「古今集の序」に短く言及したあと、話題を転じて、「天台止観」の「空・仮・中の三諦」に説き及んでいる（藤原俊成『古来風体抄』『日本古典文学全集50 歌論集』小学館、1975、274～275、277～278）。「歌道＝仏道」論の核心は、引用するとわずか四百字ほどの分量になる。

「しかるに、かの天台止観と申す文のはじめのことに、**「止観の明静なること、前代も未だ聞かず」と……うち聞くより、ことの深さも限りなく、奥の義も推し量られて、尊くいみじく聞ゆるやうに、この歌の善き、悪しき、深き心を知らむことも、ことばを以て述べ難きを、これによそへてぞ同じく思ひやるべき事なりける**」

「浮言綺語の戯れには似たれども、ことの深き旨も頭はれ、これを縁として仏の道にも通はさんため、かつは煩惱即ち菩提なるが故に……歌の深き道を申すも、空・仮・中の三諦に似たるによりて、通はして記し申

すなり」

「歌の姿心、申し述べ難しとても、ことに仏道に通はし、法文に寄せて申しなすことなり」

「この道に心を入れん人は、万世の春、千歳の秋の後は、皆この倭歌の深き義によりて、法文の無尽なるを悟り、往生極樂の縁を結び、普賢の願海に入りて、この詠歌のことばを翻して、仏を讃め奉り、法を聞きてあまねく十方の仏土に往詣し、まづは娑婆の衆生を引導せんとなり」

フランス文学者の栗田勇はかつて、この三諦の思想によって、和歌の「形而上学的なストラクチャー」が定式化されたことを、現代的語彙でわかりやすく語りなおした。「三夕の歌」の一つ、西行の有名な作品を例とすれば、「鴨立つ沢」という「一瞬のうちに消えてゆくフェノメノン」Ⅱ「仮」が、「秋の夕暮れ」Ⅱ「空」のなかで羽ばたくことで、「一挙に「中」という超越的な存在をあらためて自覚させ、呼び醒ます」となる（栗田勇『西行から最澄へ——日本文化と仏教思想』岩波書店、1996）。

このように、上の句「心なき身にもあはれは知られけり」を「中」の自覚と捉えると、西行の和歌は、字面の言葉としても、三諦の要素をすべて含んでいる。しかし俊成の歌論は、三諦を言葉で表わすというより、「諸法無我」Ⅱ「諸法実相」Ⅱ「色即是空・空即是色」、「煩惱即菩提」「悉有仏性」等々はすでに自明の仏法（真理）として、それを背景に、「仮」の世界を、「仮の世」ながら、「深い心」つまり実感をもって、言葉で魅力的に詠みあげることである。したがって、具体的な言葉はもちろん、姿や心、情調や内容も、恋歌や四季の歌、叙景歌や雑歌と区別できないことがありうる。

「釈教歌」と「神祇歌」の巻がたてられたのは、俊成が選進した勅撰集『千載和歌集』（1187）からである。この釈教歌の巻には、一見してほかの巻と区別できないものも多い。たとえばつぎの歌は、「法華経の我等長夜修習

空法の心をよめる」などの詞書によって、仏教的な真理実践の歌として読むべきことが明示されているわけである。

「長き夜も むなしきものと 知りぬれば 早く明けぬる 心地こそすれ」

仏教との関連では、そのほかにも、発心のきっかけになる歌、輪廻からの逃れがたさを痛切に詠む歌などがある（津城寛文『深層文化から頂点文化まで』ネクバブ・オースァーズプレス、2021、151～154）。

宗教体験は、天地以前、存在以前、非存在、無、無以前、「無以前」以前、等々に達する（と自己評価する、あるいは外部評価される）頂点的な神秘体験から、価値の所在が社会から自然に移ったり、地上から他界に移ったりして、それまでの価値が溶解して、別の価値に覚醒するような体験、いわゆる発心や回心の体験、また誰の目にも見えやすいものとして、ある宗派から別の宗派への改宗体験もある。

歌人は宗教的修行の専門家ではないが、和歌を空・仮・中の三諦に通わすと述べた俊成は、和歌を専心して詠むことによって、仏道修行をひたむきに実践したと言ってよい。私も、歌人にして信仰者、瞑想や祈りの実践者として、日常を詠む和歌が、そのまま仏道（宗教）に通じる、そのような者でありたいと思う。

2 歌道即仏道の日々の実践

歌人や詩人（＝芸術家）には、作品の主題や関心の所在によって、いくつかのタイプがある。恋愛詩人、社会（↓政治）詩人、労働詩人、自然詩人、思想詩人、形而上詩人、歴史詩人、などが区別できるうち、歌道＝仏道

につながりやすいのは、恋愛詩人、自然詩人、形而上詩人かと思う。恋愛詩は、恋愛対象が「神」や「真理」のメタファーとして詠まれることでも、宗教詩となるし、自然詩は、自然がそのまま神、あるいは神のメタファー、または自然が究極の次元に（間接的であれ）接続していると感じることでも、宗教詩になるだろう（津城前掲書、189～198）。

ただし接続先の世界、開示される次元の性格によって、自我に迫る法外な力に圧倒される詩人（ヘルダーリンのような）もあれば、小さな自我が溶解して、わずかに大きなものに包まれるだけの詩人（私のように小心な）もある。また戦慄と陶酔のどちらか主調音になるかで、詩歌が醸し出す宗教的雰囲気は、異なったものになる。以下、和歌を詠む日々から、近作を発表させていたきたい。宗教的な内容、形而上学的な思想を詠んでいるわけではなく、日常の物思い、風景、とくに雰囲気の景観（アトモスケープ）、森の小さな草花、鳥の鳴き声を、「仮の世ながら」、深い実感をもって、嬉しさをもって詠んでいる。日付があるのは、「歌日記」だからである（以下、日守麟伍『くりぶとむねじあ歌日記 卷之弐』パブリアンセルフ、近刊所収）。

2024年2月12日

寒さが緩んだ午後、用事を済ませて帰ってくる途上、遠い昔の物思いに沈んでいるうち、思いが尽きはてて、我に返りました。深い闇から浮かび上がってきたような、晴れた空が見慣れないもののような、不思議な気がしました。

過ぎし世の 思ひしづまりて

よみがへる 心地こそすれ

青空の奇し

（遠い昔の物思いに沈み、思いが尽きはてて静まり、やがて我に返り、生き返ってきた気がしました。空が見慣れない不思議さで広がっています）

2024年6月2日

遠い昔の、懐かしく慕わしい人を思いながら、森の辺の道を歩いていると、すぐ近くや、また遠くで、さまざまの鳥の鳴き声がつづき、曇り空の下、しめった空気のなかに、満ちています。

近く遠く かつ鳴きわたる 鳥の声

古へ人とともに行く道

（昔の人を思いながら歩いている道、すぐ近く、また遠くで、さまざまな鳥の鳴き声がして、あたりに満ちています）

開けた並木道に出ると、高い枝が風に吹かれたのか、音が降ってきました。かと思うと、雨が降りはじめ、瑞々しい葉音がして、空に膨らんでいくようです。

吹く風に 枝音やたつ

降りそむる 雨に葉音の ふくらみてゆく

(風に吹かれて、枝音が降ってきたのかと思うと、小雨が降りはじめ、瑞々しい葉音が、空に膨らんでいきました)

2024年6月14日

夏が続くころ、幼いころ恋心を抱いた人を、夏の海山の風景とともに、思い出していました。夢でも会いたいと思っていると、目の当たり、夢にでてきてくれました。

いとほしき 人思ひ寝の 夏の夜の 夢にまみゆる ありし日の影

(夏の一日、心惹かれていた人を思い出していると、寝覚めの夢で、中高生くらいの頃の面影そのままの、可憐な人に会いました)

偶然に会ったと思っていたのが、いつまでも忘れられない人になって、今でも恋しさがよみがえることがあります。

仮初に 会ひたる人と 思ひしに 恋てふものは かく燃ゆる知る

(偶然に会った人と思っていたましたが、恋しさがときおりよみがえり、若い時のように、心がときめきます)

2024年6月15日

関東は梅雨入りが遅れ、もう連日が夏日、ときに真夏日となります。日差しの強い中、森の辺の道を、大木の木陰を選んで歩き、高い草に覆われた森の道に入りました。蒸し暑く薄暗い森の中で、自分の体が身近に感じられるのは、いつも不思議な気がします。

大枝の 日陰を歩む

高草の 道に分け入る

真夏日の森

（真夏日、森の辺の大きな木の枝の陰を歩き、高草の道に入ると、不思議な安堵感に包まれます）

2024年6月23日

関東は梅雨に入ったのか、まだなのか、晴れたり曇ったり、雨が降ったりしています。晴れ間に、と思って外にでると、森に近づいたあたりで、小雨が降りはじめました。そのまま細い脇道を歩いていると、木陰を曲がったところに、一かたまりの花が咲いていました。雨水に潤った紫と白の花弁が鮮やかコントラストをなしています。

細道に たち現はるる 紫と 白の花びら 雨に潤ふ

（小雨模様の細道を行くと、雨水に潤った紫と白の花弁が、鮮やかコントラストをなして、姿を現わしました）

ヘルダーリンとジュリアン・グラック

永井敦子

フランスのシュルレアリストたちは、ドイツ・ロマン派への強い共感を表明していた。アンドレ・ブルトンらはナチズムへの抵抗運動を強めていたさなかの一九三三年にも、アヒム・フォン・アルニムのフランス語訳短編集に序文を与えている。両大戦間期にブルトンらが示したドイツ・ロマン派の作家たちへの関心は、彼らの自然観や人間観がドイツの国家主義的傾向を下支えしているといった認識に回収されてしまうことへの、抵抗でもあっただろう。

ジュリアン・グラック（一九一〇—二〇〇七）は、第二次世界大戦前後にシュルレアリスム運動と関わりを持ちながら、それまでの運動に見られた共同制作や社会行動からは距離を置いた第二世代にあたるが、ドイツ・ロマン派への共感の表明という面ではブルトンを引き継ぎ、加えて自身がエルンスト・ユンガーの友人であることも公表している。

グラックがドイツ・ロマン派に認めるものは、たとえば次のような彼の言葉に端的にあらわれている。

信頼に充ちた同意と和合の、理非を超えた溢れるような感情がそこから湧きのぼってくる、文字どおり生命の歌が迸ってくる静穏の水源。私にとってはノヴァーリスやヘルダーリンの作品、今日ではまたユンガーの作品を通じて、尽きることなく湧いてくるあの静穏の巨大な水源、今日われわれの生きている世界、悲劇的なものがあまりにも容易に受け入れられ、そうしたものを過重に負わされた世界にあっては、その水源に近づく道を開いてくれる何物もないがしろにされてはなりませんまい。（*）

グラックはナントに近いロワール川下流の沿岸の、小売業を営む小地主の家に生まれた。地方出身の学歴エリート道を歩み、地形学の博士論文執筆のために故郷の近くでフィールドワークをしていたが、第二次世界大戦後に、パリで高等学校の地歴教師をしながら創作する生活を選んだ。彼はある対談で「私は地面に触れるたび力を取り戻すアンテの神話が好きです。しかしそれは私にとって、農耕詩的な小説に惹かれるということではないし、「触れる」といっても、農業ということでは全くありません」と言っている。彼は文学に、自然とのつながりを人に感じさせる可能性を見る。またそれは人と自然の関係にとどまらず、人と人とのつながりにも及んでいる。先の引用の少し前で、彼はこうも言っている。

トルストイのページはそれを読むだけで、季節や地球運行のリズムに深く結びついた人間樹液、われわれを潤しわれわれを活力で充たす樹液の感情、失われたその感情をわれわれにとりもどさせてくれます。おそらくはもっとも冴えた意識よりはるか以上に、この樹液を通じてこそわれわれはたがいの心を通い合わせることができるでしょう。（*）

シュルレアリスムにおいて、自動書記など意識の制御を抑えたエクリチュールの実践に、理性による検閲に抑圧されている意識下の解放が期待されていたとしても、それがめざしたのは私という個の内部の再発見以上に、他者と共有する樹液の源泉に触れているという、「個」を超えた生の実感であつただろう。

しかしグラックも、根拠のない楽天主ではない。彼はドイツ・ロマン派の時代を「あらためて思い返すべき」黄金時代と位置づける。一九一〇年生まれの彼は、二十世紀のふたつの世界大戦を経験した世代に属する。第一

次世界大戦では、戦死兵の家族に死亡通知を配るため、町内を自転車で走り回る町長の姿を見たことが初めての喪の経験として記憶に刻まれ、第二次世界大戦では、ベルギーとの国境付近で「奇妙な戦争」を身をもって生き、銃撃戦を経てドイツ軍の捕虜となり、収容所生活を経験した。収容所では空腹に苦しみ、カロリー消費を抑えるために腹這いになって二作目の小説を構想した。空腹の記憶は、毎朝黒パンを部下に分配した、中尉としての彼の役目の思い出につながっている。「生存の保証」たるパンは、四人の部下が固唾を飲んで見守るなか、「難しい外科手術のような」厳密さで彼が五つに切り分けた後、くじ引きで取られてゆく。その「味わいと活力の塊」に「それまで感じたことのなかった充たす力を」感じたと、グラックはつけたす。戦後、彼はこの戦争で知ったドイツの黒パンを、今でもときどき無性に食べたくなることがあると書いた。バゲットにはない稠密さと重みを持つ黒パンのごつごつした歯触りは、彼にとっては生死を賭けた戦闘と、悲惨と屈辱の捕虜生活を体験してもなお、その下に揺るぎなく、国境によって隔てられることもなく存在する、命を育み、自分を他者のあいだにつなぎとめる大地、ヘルダーリンの農夫が耕す大地そのものの歯触りだったのだろう。

(*)ジュリアン・グラック『偏愛の文学』、中島昭和訳、一九七八年、白水社。

十字架のヨハネのいくつかの詩の私訳(併びに付説)

鶴岡 賀雄

十字架のヨハネ (Juan de la Cruz, 1542-1591) は近世スペインの修道士。そのいくつかの詩はスペイン詩史上の珠玉とされる。邦訳はすでに何種類もあり、西和对訳版十字架の聖ヨハネ詩集』(西宮カルメル会訳、新世紀社)もある。芳賀徹訳・今井俊満装画『聖霊頌歌 暗い夜』(非売品)もある。以下は、とくに名高い四編の私訳である。原文にほぼ逐行対応させているが、言葉遣いは私の読み込みによる。推定だが、制作時期の早いものから並べた。

一 [夜の泉]¹

たしかにわたしは知っている 湧き出て溢れるあの泉を
いまは夜だけれど

「十字架のヨハネの詩には、今日的な意味でのタイトルはない。この詩は、リフレインをとって「夜なれど (Aunque es de noche)」と呼ばれることが多い。吉満義彦や若い井筒俊彦が自らの思いを託すように引用している。冒頭の二行は詩全体のテーマで、「夜だけれど」の一句が各連のリフレインとなる。当時よく行われていた詩形で、十字架のヨハネは同様の形式の作品をほかにもいくつか作っている。

あの永遠の泉は 隠されている けれど
たしかにわかる その源が どこにあるのか
いまは夜だけれど

〔この人の世の 暗い夜にも
信じることで たしかにわかる あの涼しい泉が
いまは夜だけれど〕²

そのはじまりを わたしは知らない はじまりなど ないのだから
でもわかる どんなはじまりもこの泉から 流れ出てくる
いまは夜だけれど

わたしはわかる これにまさって美しいものはありえない
天も地も この泉から飲む
いまは夜だけれど

² この「連」は、別人の補作。当時の詩的トポスだった「涼泉(fontefrida)」を組み込むためか。

わたしはよくわかる　この泉には底がない
だれも泉を渉れない

いまは夜だけれど

泉は澄んで明るくて　翳りひとつない

それでわかる　あらゆる光はここから来ている

いまは夜だけれど

わたしはわかる　水の流れはとても豊かで

地獄も　天も　人々も　潤していく

いまは夜だけれど

泉から　生まれる流れは

とても強くて　なんでもできる　わたしはそれがよくわかる
いまは夜だけれど

この泉と流れから　またもうひとつ流れができて

泉と流れとともに流れる。わたしはそれがよくわかる
いまは夜だけれど

〔わたしにはよくわかる この三つには 同じひとつのいのちの水が
めぐり流れて あれからこれが流れでるのを
いまは夜だけれど〕⁴

この永遠の泉は 隠されている
この いのちのパンのなかに わたしたちにいのちをくれるために⁵
いまは夜だけれど

生きとし生けるものはみな ここへと呼びかけられている
暗い中でも この水で 満ちたりるから
いまは夜だから⁶

³ 父と子と聖霊の三位一体関係（泉⇨父、流れ⇨子、もうひとつの流れ⇨聖霊）が示唆されている。

⁴ この連も別人の補作。三位格が一実体であり、聖霊は父と子から出るといふ教義を示す。

⁵ 聖体拝領の教義が詠みこまれている。

⁶ この連だけ、リフレインは「いまは夜だから(porque es de noche)」。

わたしが願うこのいのちの泉
それをいま このいのちのパンのなかに見ています
いまは夜だけれど

二 魂とその恋人が交わす歌、

女。

どこにかくれてしまったの？ 愛するあなた

わたしを泣いたままにして。

鹿みたいに あなたは逃げた

わたしを傷つけておいて。

「原文は *Canciones entre el alma y el Esposo*。『タイトル』として掲げられている。「靈的頌歌 (*Cántico Espiritual*)」(邦訳では「靈の賛歌」と通称されている。旧約雅歌の翻案とも読め、雅歌からの引用も多い。製作段階に依じていくつかの形態があるが、掲げたのはその最終形態。

。原語は *Esposa*。男性形は *Esposo*。花嫁／花婿と訳されることが多い。この作品には、情景描写のような連
〔歌〕も含め、すべての連にその発話者が設定されている。

あなたを追って外に出た　あなたを呼びながら。でももういなかった。

そこを行かれる羊飼いたち、

牧舎の向こう　丘の上まで行くのですね。

もし　どこでなりとも会われましたら

わたしが大好きなあの人に

伝えてください　わたしは病気で　苦しいです　死にそうですと。

わたしの恋を追いかけて

わたしは行くわ　この山河を越えてでも。

花を摘んだりもうしない。

獣たちもこわくない。

砦だの　国境だのも越えていく。

ああ　森の木立　草の繁み

みな　あの人の手で　植えられたもの。

ああ　緑なす草原

花々がちりばめられて。

教えて。　あなたがたのところを　あの人　通りませんでした？

自然が答える

その方なら 千の魅力をふり撒きながら
この木々の繁みを 急いで過ぎて行きました。
でもとおりすがりに目を向けられて
そのおもぎしのちからだけで
繁みたちに 美の衣を纏わせていったのです。

女

ああ 誰がわたしを癒やせるのか、
もうほんとうに あなたをください。
送りつけるのはやめにして
伝言なんて 今日限りで。
わたしがのぞむあのことを 言えはしないのだから。

道ゆく人は だれもみな
わたしに伝えて過ぎて行く 数限りない あなたの魅力を。
それでいつそう 傷が痛む。
わたしを死にそうにさせてしまうこと それは

みなが口ごもるままの　　なんだかわからない何か。

なのに　　どうして永らえていられるのか

ああ　このいのち！　おまえがいま生きているところには　いのちは無いのに。

そのうえ　おまえを死なそうとしているのに

おまえが受けたいくつもの箭が。

恋人から　おまえのうちに受けとった　あのものゆえに。

傷つけてしまったのだから　あなたはなぜ

癒やしてくれないの？　この心を。

そのうえもう　攫ってしまったのだから

どうして　こうして放っておくの？

攫った獲物を　持つていつてはくれないの？

わたしの苦しみを終わらせて。

あなたにしか　それはできないことだから。

わたしのこの眼で　あなたを見たい。

あなたがわたしの眼の光だから。

あなたを見るために　眼をもっていたいから。

あなたの姿をみせてほしい。

その美しさとまなざしで わたしを殺してほしい。

わかってください、愛ゆえの

この病を 治せるのは

あなたの姿と お顔しかないのです。

ああ 水晶の泉

おまえの その白銀の水面に

とつぜんに 姿が浮かび上がればいいのに！

わたしの願う あの瞳

胸の奥にうつすら浮かぶ あの瞳が。

わたしを見ないで、あなた！

わたし 飛んでいきそう！

〔男〕

戻っておいで 鳩よ。

傷をうけた鹿は

丘のあたりに姿をみせて

。この連では、三行目の途中で発話者が「男」に変わる。

おまえの飛ぶ風を受けて 涼むのだから。

女

わたしのあのひと、あの山なみ

人気のない 樹々繁る谷

遙かな遠い島

響きたてて流れゆく河

愛を誘う そよ風のささやき

静かな夜

もうすぐ朝日がたち昇るころの

静寂（しじま）の調べ

響きわたる孤独

つかれを癒やし

愛かき立てる 夜の宴。

仔狐どもを追い払って。

わたしたちの葡萄園は もう花盛り。

たくさんのお花で

花玉をつくれるくらい。

この山のほうには 誰も来ませんように。

吹き止みなさい、死んだ北風。

吹いて来て、南風。愛を目覚めさせるから。

わたしの果樹園を吹きぬければ

あたりに香りが流れめぐって

あの人は花に囲まれて食事を摂るわ。

ああ、ユダヤのニンフたち、

花々が 薔薇たちが

龍涎香の香を漂わせている その間は

垣根の向こうにいてください。

わたしたちの木蔭には 入ってこようとしないでください。

隠れて、あなた、愛しいひと

山なみのほうに お顔を向けて。

そうして何にも言わないで。

ただ おつきの女たちに目を留めて。

遙かな島々をめぐりゆく この女の。

男

軽やかに舞う鳥のむれ

獅子たち 鹿たち 飛び跳ねる山羊

山々 溪谷 川の岸辺

流水 吹く風 こもる熱気

眠れない 夜のおののき

おまえたちに 心地よい豎琴の音と

人魚の歌声によって願う。

おまえたちの怒りを鎮め

壁を打つのはやめてくれ。

わたしの花嫁がもつとやすらかに眠れるように。

花嫁はもう 入っている

憧れの快楽の園に。

思うままに 憩うている

うなじを凭せかけている

恋人の甘い腕に。

あの林檎の樹の下で

そこで あなたはわたしと愛を誓った。

そこで わたしはあなたに手を差し出した。

それで あなたはきれいになった。

あなたの母が 穢されたその場所で。

女

わたしたちのベッドは花に飾られ

獅子の洞穴で囲まれて

深紅の天蓋で覆われて

やすらかに設えられて

無数の黄金の盾を繞らせている。

あなたの歩んだ跡をたどって

若い女たちが駆けていくわ。

火花に触れられたように

うま酒に酔ったみたいに

神々しい香油のような息を吐きながら。

奥深い酒蔵で

恋人の手から わたしは飲んだ。そうして外に出てみると

広い野原の みわたす限り

知っているものは何もなかった。

追っていた羊もいなかった。

あそこで この人はわたしに心をくれた。

あそこで とても甘美な学問を教えてくれた。

そしてわたしも すべてをあげた

何ひとつ 残すことなく。

あそこで この人の妻になると約束したのだわ。

わたしの心は 受けとめられた。

だから物物は ぜんぶあの人のために使います。

もう 羊の群は追いません。

ほかに 仕事も何もしません。

もう愛することだけが わたしのつとめなのだから。

だからもう 村の入合地に

今日からわたしがいなかったら わたしの姿が見えなかったら
行方知れずと 言ってください。

だってわたしは 愛に駆られて
姿を消したのだから。愛の獲物になったのだから。

花々と エメラルドを

爽やかな朝に摘み集めて

いっしょに花輪を作りましょう

あなたの愛で咲いた花を

わたしの髪で編みあわせて。

この髪の一筋が

わたしのうなじに流れるのを あなたはじっと見つめていました。

その髪を わたしのうなじに見つけていました。

髪に夢中になっていました。

わたしの瞳ひとつが あなたを縛ってしまったのです。

あなたがわたしを見てくれたとき

あなたの瞳の麗しさを わたしに刻み込んでくれました。

だから わたしを とても好きになったのです。

それで わたしでもできるようになったのです

わたしの瞳が あなたを見つめて 心から讃えることが

わたしを 卑く見るのはやめて。

わたしの肌は 黒かったけれど

わたしをじつと見つめていいの。

だってあなたがわたしを見つめてくれた そのときから

麗しさ 美しさを わたしにのこしてくれたのだから。

男

白い小鳩は

方舟に 若枝を銜えて帰って来た。

小鳥はやつと

愛するつがいを

緑の岸辺に見つけたから。

小鳥は孤独に生きていた。

孤独のうちに 巣を懸けた。

孤独のなかの 導きは

たったひとりの 思い人。

その人もまた 孤独のうちに 愛に傷ついていたのだったが。

女

もつと楽しみましょう あなた

あなたの美しさのなか 見に行きましょう

あの山へ あの丘へ。

そこには清水が湧いていて

繁みのもつと奥のほうまで 一緒に入っていきましょう。

そして高いところに出たら

洞穴のある岩場まで ふたり一緒に行きましょう。

そこはとても隠れた場所

そこに一緒に入りましょう。

そして 石榴のお酒を味わいましょう。

そこで わたしに見せてください。

ここから懂れていた あのものを。

そして わたしにくださいね。

そこで あなた わたしのいのち、

遠いあの日にくださった あのものを。

風がそよぎ

小夜鳴き鳥の甘い歌がきこえる。

繁る木立と その麗しさ。

そんな静かな夜に

燃やし尽くして でも苦しくはない 炎が燃えている。

見る者は 誰もなかった。

アミナダブも姿を消した。

包囲の陣も やすらぎを得て

騎士たちは

水辺めざして降りていった。

三 〔暗い夜〕¹⁰

暗い夜に

愛に焦がれて かき立てられて
なんてしあわせな冒険でしよ
う
気づかれもせず 家を出ました
わが家はもうひっそりとして

闇のなかを 迷いなく

秘密の梯子で 姿も変えて

なんてしあわせな冒険でしよ

う
闇のなか 顔も覆って

わが家はもうひっそりとして

このしあわせな 夜のなか

そっと隠れて だれにも知られず

¹⁰ 「暗夜(Noche Oscura)」と通称される。

わたしもなにも 見はしなかった

導く明かりは なにもなかった

心に燃える 光のほかには

それがわたしを 導きました

真昼の光より もっとたしかに

そこで待っていてくれました

よく知っている あのひとが

そこにはほかに誰も来ない

ああ 夜よ あなたが導いてくれた

ああ あけぼのよりも いとしい夜

ああ 夜よ あなたがふたりを 結んでくれた

恋する男を 恋する女と

恋する女が恋する男と 同じ姿に変わるほどに！

花のようなわたしの胸

この人だけに けがれなくまもってきた

そこにこのひとは まどろんで

わたしはかれを いくしんで

杉の扇はそよ風を送っていました

お城のほうから 風がながれて

恋人の髪をまさぐる わたしにふれた
その透明な手で

うなじを掠めた

あとはもう なにもわからなかった

そのままじつと すべてを忘れて

恋人に 頬よせたまま

すべてはやんだ もうなにもしない
思い煩いは うちすてられて

白百合の間に 忘れさられて

四 神との内密な合一のなかで魂がつくった歌^二

ああ 愛の炎 あなたは生きている！

そしてやさしく傷つけてくる

わたしの魂の いちばん深い真ん中を！

でも あなたは優しい方。 だから

もう おねがいだから 終わりにして

この甘い出会いの 隔てのヴェールを引き裂いて！

ああ 火傷がこちよい！

ああ 傷口がうれしい！

ああ 柔らかな手が！ ああ 繊細にそっと触れてくる！

これこそ永遠のいのちの味わい

なにもかもが報われる

あなたはわたしを殺したのに、死をいのちへと 変えてくれた！

ああ 篝火が燃えて

^二 「愛の生ける炎(Llama de Amor Viva)」と通称される。文法上はすべて感嘆文で歌われている。

その照り映えのなか

感官の深い洞窟から

まえは暗くて なにも見えなかったのに

えも言われない麗しさで

熱と光が放たれてくる 肌寄せる恋人にむけて！

なんておだやかに でも愛おしく

あなたは目覚めるのかしら わたしの胸で

そこは あなただけが住まう ひみつの場所

そのあなたの 甘い吐息

善と栄光に満ち満ちて

なんて繊細にわたしを夢中にさせることでしょう！

・ヘルダーリン／ハイデッガー

鎌田東二さんの詩集を書評する機会を、鎌田さん自身の紹介でいただいた。鎌田さんのある意味での処女作『水神傳説』（昭和59年）から『悲嘆とケアの神話論』（令和5年）まで、5冊ほどになるうか。そうした機縁で、ヘルダーリンの詩をハイデッガーの「解明」に即して読む、というオンライン読書会に誘われた。私には、「ど真ん中」の読書会だった。鎌田詩集を書評したときの背景にあった私自身の詩観は、まさにハイデッガー経由のヘルダーリンを基準の一つにしていたからである。

私がヘルダーリンを始めて読んだのは大学の学部時代である。いささか哲学青年だった私は、ハイデッガーの「転回」以降の思想に興味をもって、いくつかの著作を素人読みしていた。哲学や文学は原書で読まねばならない、という教えを真に受けて、習いたてのドイツ語で、理想社版のハイデッガー選集を助けに、『ヘルダーリンの詩の解明（*Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*）』にも取り組んだ。そしてハイデッガーの解明以前に、冒頭に全文が掲げられていたヘルダーリンの詩そのものに衝撃を受けてしまった。「帰郷―近親者に寄す―

（Heimkunft/ An die Verwandten）」の冒頭、第二行目末の「das gähende Thal」（手塚富雄訳は「暗き谷の顎（あぎと）」）まで読み進んだところで、もう異様な感動が迫って来た。時は昭和四十年代なので、「ガーン！」という古い漫画用語で表してもみたい衝撃感である。

文法もおぼつかなく、辞書を引き引き読む当時の（今でもだが）私に、ヘルダーリンのドイツ語がちゃんと読めようはずはない（今でもだが）。だからまったく主観的な、独りよがりの勝手な震撼である。しかし感動は有無を言わせないものだ。誤読誤解だろうと、絶対的権威をもつ。感動自体に「正誤」判断は適用されない。

だから、ドイツ語に精通し、ネイティブのような語感、音感を身につけ、文学史の該博な知識がなければヘルダーリンを「正しく」読めないなどということはない。七五調が沁みついている日本語ネイティブでなければ和歌は味わえない、わかるはずがない、などということはないのと同断である。げんに、そんな私の幼いヘルダーリン体験が、上述したように、爾来「詩」とは何かを考えるときの、また私なりに詩作品を評価するときの、不動の基準の一つ（すべてではない）となっている。

詩についてのこの経験が、ハイデッガーの「解明」に導かれ、支配されたものかどうかは、わからない。しかし、後期ハイデッガーへの私なりの（これもほとんど誤解なのだろう）理解から、ヘルダーリンの詩を読んだ感じた何かを取り除くことはできない。ハイデッガーの言いたい（のだろう）ことに、哲学的「理論」とどこまらない実質を与えているのが、ヘルダーリンの「詩」である。

・十字架のヨハネ

私の専門は、ドイツではなくスペインの神秘思想である。その中心に据えてきたのが、十字架のヨハネである。大学院時代に取り組んでから既に半世紀、この見知らぬスペインの人の文章を読み解こうとすることで、人生の大半は過ぎたのだと思うと、うたた感慨を覚える、というべきかもしれないが、案外そうでもなく、「ああ、人生とはそんなものか」というのが正直なところである。

その十字架のヨハネは、キリスト教神秘家の代表者の一人だが、詩人でもあることが彼の神秘思想を際立たせたものになっている。「詩人神秘家」であることが彼の大きな魅力である。では、十字架のヨハネにおいて、詩と神秘思想はどう関わっているのか。いろいろ論じだすとどうしても長くなるので、要点だけを言うところのようになる。十字架のヨハネにおいては、その神秘思想はまず「詩」として言語化された。言語以前の体験・経験

の地平を文字通り言外に想定するとして、そしてそこにこそ「神秘」の實質があるとして、その實質にいちばん近い言葉、實質から最短距離で言葉になったものが彼の詩だった。このことは彼の生涯の歩みからまたでられるのだが、著作の形態、形式自体に端的に現れている。十字架のヨハネのまとまった著作である『カルメル山登攀』、『暗夜』、『霊の賛歌』、『愛の生ける炎』の四編は、すべてが自作の詩（上に私訳を掲げた）の「解明（declaración）」として著されているのである（『カルメル山登攀』と『暗夜』は、ともに「暗い夜」の解明）。

いずれの著作でも、まず冒頭に、解明される詩の全体が掲げられる。その上で、「連」ごとに順を追って解明がなされていくのだが、その都度、解明される連が掲げられ、さらにほぼ一行ごとに、そこに込められている「意味」が、修道者が神との合一の道行きの途次に経験するさまざまな心理状態やその神学的意味として説き明かされていく。そしてこれが、彼の神秘思想の表明となっていく、という次第である。つまり、彼の神秘思想とは、まず詩として言語化され、その詩の言葉に結晶した神秘的合一の境地が、詩の言葉の解明というかたちで、知的に了解可能な理論言語の地平に開き陳べられたものである。とともに、こうして解明されることで、詩的感興は生みつつもその意味の知的な了解はできなかった詩に理論的・思想的意味が充たされて、詩の言葉の新たな読みが可能になる、という一種の循環的效果が生まれる。そしてその循環がさらに、詩の言葉がそこから生まれてきた、言語以前の神秘的合一の境地そのものをなんらか感知させる、という効果が期待されている。こうした、「言語以前の神秘」⇔「詩の言葉」⇔「解明（理論）の言葉」という、言葉の三次元の往還自体が十字架のヨハネの神秘思想の基本構造でもあり、彼が「詩人神秘家」と呼ばれてよい所以となっている。

わかりにくい説明になってしまったが、言いたかったのは、ハイデッガーの『ヘルダーリンの詩の解明』は、十字架のヨハネの著作と同じかたちをしているのではないか、ということである。十字架のヨハネの場合

は、詩人と思想家が同一人物となっているけれど。では、もしやハイデッガーは、十字架のヨハネを意識して、「詩の解明」という形式の哲学書を試みたのか。そんな可能性は小さいと思うが、彼が十字架のヨハネの本をまったく知らなかったとも思えない。詮索はどうでもよいが、十字架のヨハネからハイデッガーまで、ということとはもつと古い時代からもつと新しい時代まで、さらには西洋という地域的枠を越えて、詩と神秘思想のかかわり、拡げて言えば「宗教的なもの」と「詩的なもの」との本質的にかかわりは、おそらく普遍的に見いだされるもので、私自身により惹かれるものである。鎌田東二さんの仕事への私の深い共感もここに由来している。

ヘルダーリンのギリシャ

鎌田 東二

ヘルダーリンのギリシャは、狂いと愛とあこがれと記憶の中にある。
それは、帰郷することの叶わぬ故郷であり、届かぬ諸源である。

ヘルダーリンは、宣言し、嘆き、狂いながら神託をもらす。
ディオオーティーマに、ディオオーティーマから。

そのヘルダーリンの園に入ることはできぬ。

施錠しているのは、彼方の存在ではなく、訪問者自身だから。

だからこそ、ヘルダーリンは吾だと言っておこう。

そんな戯けた彫琢を通して、虹の橋を渡る。ギリシャへ、泉へ、デルフィーへ。

ディオオーティーマは聴く。雷鳴を。
脳天から大地へと貫通する声を。

そうして、ヘルダーリンは、記す。

人間の霊は最初のしるしによって、完成したもののことをすでに知り、
大胆にも鷲のように**雷雲**に向って

飛び立ち、来たるべき神々を

あらかじめ**預言**して、

(『ヘルダーリン全集 詩Ⅱ 1800 - 1843 2』15 - 16頁、手塚富雄訳、河出書房新社、1966年初版、2007年新装版)

そして、この詩篇「ルソー」は、ここで中断する。

中断はしているが、つぶやきと預言はつづく。

訪問者は、みずからの「霊」を鍵として、施錠を外し、秘密の園に入り、
ディオオーティーマ、ヒュペーリオン、ルソー、そして、ヘルダーリンと語らう。

そこには、言葉は、ない。

ギリシャ語もラテン語もドイツ語も、ない。

自然のことばだけがいきかうのだ。

鎌田東二のギリシャ、あるいは、デルフォイの夢

一九八二年八月、デルフォイの神殿に立った。

雲一つない抜けるように蒼い空。どこまでもその蒼の中に墜ちていくような。

かつて古代ギリシャのアポロン神殿のあったその場所は、今は神託も信託も託される何ものもなく、真昼間の何一つ翳りのない陽光の中で明るい廃墟であるばかりだった。

その昔、アポロン神殿の権威はギリシャ全土に広がり、汝自身を知れの格言が神殿の額に掲げられていたという。今はちらほらと観光客はいたが、それほど数ではない。強い日差しの中で緩慢に移動する人びと。

地形を見回し、アポロン神殿の脇からバルナツソスの山に登った。山頂で誰もいないのを確認して素裸になった。小学五年の時、『古事記』を読み、続けざまにすぐギリシャ神話を読んで以来、ギリシャに憧れていた。

そしていつしかギリシャに行ったら、その輝くばかりの陽光の下で真裸になってその光を一身に受けたいと思いつけてきた。三十一歳の夏、その子供の頃からの願望を達成した。

素っ裸で祝詞を奏上し、龍笛を奏でた。その時、ダダンダダンと空が鳴った。ダイナマイトでも仕掛けて山を爆破しているかのような。おそらく観光客相手のリゾートホテルを建てるために山を切り崩しているのだろう。そう思うとむしろかなしくなった。

たった一人の儀式を終えて、宿の近くのタベルナに入って遅い昼食を摂ろうとした。

途端、これまで経験したことのないスコールが襲ってきた。篠突く雨というか、爆弾のような、連射砲のよう

な雨雨雨。

その時、強烈な閃光が走り、しばらくして物凄い音響がダダンダダンと空に鳴り響いた。カミナリだった。身震いするほどそそけだった。

その夜、夢を見た。

泉の前に立っていた。

泉から金色の湯煙が立ち上ってくる。

そこに近づき、飛び込んでいきたい気持ちがあるが、恐れ多いような、神々しいような畏怖の念を感じて佇んでいた。

その時、金の泉の中から声が聞こえてきた。

「美しいものを美しいものとして見るのではなく、醜いものを醜いものとして見るのでもなく、ただありのままに見つめよ」

そして、予言の言葉が続いた。

何処から来て何処へ行くのか。

その道筋を示す言葉を得て慄然とし、ありのままに見つめることを座右の銘とするほかなかった。行き先は不明でもその流れに乗るほかなかったのだ。

空海とヘルダーリン

吾が研究の出発点に空海が居る。問題の核心は、神秘体験と詩と救済、である。

空海の処女作『三教指帰（原題は「聾瞽指帰」）』には、四篇の自作「詩」が記されている。紫式部の『源氏物語』が「歌物語」であるとすれば、空海の『三教指帰』は「詩物語」である。『源氏物語』全篇の和歌数は795首、空海の『三教指帰』は漢詩4首にすぎないが、しかし、その「詩」の重要性では「歌物語」である『源氏物語』に匹敵する。

空海は主要な重要命題をすべて「漢詩」で表現したのだ。主著である『即身成仏義』『声字実相義』『卍字儀』『秘藏宝鑰』『般若心経秘鍵』、すべて同様である。肝心要の核心を「詩」で表わしたのだ。

本『あぐら』53・54頁で、鶴岡賀雄は十字架のヨハネの詩と思想との不可分離性を次のように述べている。長文だが、最重要な箇所なのでその部分の全文を引いておく。

「十字架のヨハネにおいては、その神秘思想はまず「詩」として言語化された。言語以前の体験・経験の地平を文字通り言外に想定するとして、そしてそこにこそ「神秘」の実質があるとして、その実質にいちばん近い言葉、実質から最短距離で言葉になったものが彼の詩だった。このことは彼の生涯の歩みからもとどられるのだが、著作の形態、形式自体に端的に現れている。十字架のヨハネのまとまった著作である『カルメル山登攀』、『暗

夜』『靈の賛歌』『愛の生ける炎』の四編は、すべてが自作の詩（上に私訳を掲げた）の「解明

(declaración)」として著されているのである（『カルメル山登攀』と『暗夜』は、ともに「暗い夜」の解明）。

いずれの著作でも、まず冒頭に、解明される詩の全体が掲げられる。その上で、「連」ごとに順を追って解明がなされていくのだが、その都度、解明される連が掲げられ、さらにほぼ一行ごとに、そこに込められている「意味」が、修道者が神との合一の道行きの途次に経験するさまざまな心理状態やその神学的意味として説き明かされていく。そしてこれが、彼の神秘思想の表明となっていく、という次第である。つまり、彼の神秘思想とは、まず詩として言語化され、その詩の言葉に結晶した神秘的合一の境地が、詩の言葉の解明というかたちで、知的に了解可能な理論言語の地平に開き陳べられたものである。とともに、こうして解明されることで、詩的感興は生みつつもその意味の知的な了解はできなかった詩に理論的・思想的意味が充當されて、詩の言葉の新たな読みが可能になる、という一種の循環的効果が生まれる。そしてその循環がさらに、詩の言葉がそこから生まれてきた言語以前の、神秘的合一の境地そのものをなんらか感知させる、という効果が期待されている。こうした、「言語以前の神秘」⇔「詩の言葉」⇔「解明（理論）の言葉」という、言葉の三次元の往還自体が十字架のヨハネの神秘思想の基本構造でもあり、彼が「詩人神秘家」と呼ばれてよい所以となっている。」

この十字架のヨハネに対する鶴岡賀雄の評言と要点整理は、まったく空海そのものの真髓を言い表しているのだ。鶴岡の言葉は、空海その人のありようと著作のスタイルを完璧に言い当てている。

こうして、わが卒業論文「東洋と西洋における神秘主義の基礎的問題への試論」（主査…三枝充恵、副査…藤田富雄）における空海とヤコブ・ベーメの神秘体験と言語哲学の比較と、補論としてW・B・イエイツの詩と民俗

研究と霊媒的ヴィジョンの描出やアルチュール・ランボーの詩と「見者」の思想の考察は、73歳のこの『あら』創刊号において、次なる検証のステージⅣ？に入ったのである。

三枝さん、あなたは、わたしの卒業論文を「偉大なる失敗作」と評しましたが、わたしはそうはおもっていませんでした。吾が卒業論文は「偉大なる耕作」でした。

空海は、「三教指帰」の最終章「仮名乞児論」で次の四篇の詩を載せている。

- ① 「懷写頌」 10行
- ② 「無常賦（受報詞）」 58行
- ③ 「生死海賦（大菩薩果）」 40行×2＝80行
- ④ 「十韻詩（詠三教）」 10行

次号で詳しく述べていくが、空海のこの「詩」作は傑出している。その「詩作」の重要性については、『性霊集』と題してまとめられた漢詩集を持つ空海であるから、これまでいろいろな空海研究者が指摘してきたことではある。が、しかし、その「詩」の意味と空海密教思想との相互関連性については、残念ながら、まだほとんど詳細に検証されていない。残る人生の一部をその検証と説明に当てたい。

空海はン、待っとくんはなれ！

さて、ヘルダーリンである。空海とヘルダーリンに共通するところ、それは巨大な天然自然（それをのちに「空海」と総称）の「カミナリ」に撃たれていることである。

空海は、『三教指帰』『生死海賦』に次のように記している。

噐々雷響日日已衆 噐々（かいかい）として霆（いかづち）のごとく響いて、日に日に已に衆（おお）く
隣々雷震夜々既充 隣々（りんりん）として雷（らい）のごとく震（ふる）うて、夜な夜な既に充てり

「霆・雷」という「カミナリ」に貫かれたのだ、空海は。若き山林修行者として、吉野や熊野や四国の山野を跋涉し、虚空蔵求聞持法を修しながら。

ヘルダーリンは「あたかも祭りの日に」に記す。

かくして今や危険もなく

大地の息子らは天の焰を飲む。

だがわれらに相応しいのは、おお、詩人たちよ！

神の雷雨のただ中に、頭を曝して立ち、

父の光りを、それそのものを、手ずから

掴み、そして歌にくるんで

Und daher trinken himmlisches Feuer jetzt
 Die Erdensöhne ohne Gefahr.
 Doch uns gebührt es, unter Gottes Gewittern,
 Ihr Dichter! mit entblößtem Haupte zu stehen,
 Des Vaters Strahl, ihn selbst, mit eigener Hand
 Zu fassen und dem Volk ins Lied
 Gehüllt die himmlische Gabe zu reichen.
 Denn sind nur reinen Herzens,
 Wie Kinder, wir, sind schuldlos unsere Hände,

かくして今や危険もなく
 大地の息子らは天の焰を飲む。
 だがわれらに相応しいのは、おお、詩人たちよ！
 神の雷雨のただ中に、頭を曝して立ち、
 父の光りを、それそのものを、手ずから
 握み、そして歌にくるんで
 民に天の賜物を頒つことである。
 子供らのように、われらもひたすら純なる心をもっている、われらの手に罪はないのだ。

民に天の賜物を頒つことである。

(『ヘルダーリン全集 詩II 1800 - 1843 2』148頁、手塚富雄訳、河出書房新社、1966年初版、2007年新装版)

極癡大敬長頭無端遠尾
 莫極舉錯擊尾張口乳食
 吸波則離欲之船撞推帆遙
 吐霧則慈悲之舸揖折人
 逐且泳且涵志意不式或贊
 或贊心性非直如蟹如溪渡

億虛大腹以容衆流淵鴻口
 而呼諸沍襄陵之汰洶不
 息凌崎之浪瀾相逐碰
 運響日之衆麟雷震
 夜之既充衆物果積羣品
 夥叢何恠不肖何詭不豐
 其鱗類則有慳貪嗔恚

カール・グスタフ・カールス『プシュケー 魂の発展史のために』(一八四六／一八五二)

深澤英隆訳

【訳者前言】

カール・グスタフ・カールス (Carl Gustav Carus 一七八九-一八六九) は、医学者、解剖学者、心理学者、自然哲学者、K・D・フリードリヒ門下の画家であり、ドイツ自然科学アカデミーの会長を務めるなど、科学者としての名声を極めた研究者であった。他方で、通常ドイツ・ロマン主義を代表する存在のひとつとも目されるカールスの自然研究の理念的前提はゲーテとシェリングであり、形而上学的思想枠組みとの混交が見られるその科学・医学面での業績は、長く顧みられることもなかった。しかし本書『プシュケー』を代表とする心理学関連の業績については、深層心理学やホリスティック医学を先取りした内容をもつものとして、折々言及がなされてきた。

「無意識 (das Unbewusste)」は、すでに一八世紀末から用例があり、カールスが創出した概念ではない。しかし『プシュケー』は、この概念を中心的概念として考察を展開し、無意識の多次元的な位相を正面から捉えようとした歴史上はじめての著作であった。フロイト以降の無意識心理学は、カールスや他のロマン主義心理学者の無意識論を前科学的な業績として背景に押しやることによって、そこから受けた影響の痕跡を消し去ろうと努めた(特にフロイトにはカールスへの言及が一切ないが、フロイトの蔵書に数多くのカールスの著作があったことが確認されている)。

この「前科学」性というのは、カールスらの心理学論の形而上学的な性格ということにある。カールスは経験

科学者であり、また精神医療をも含めた臨床医としての豊かな経験をもっていた。他方でカールスは、まだ唯物論的自然主義が内化され、形而上学が放逐される前の時代の知識人であった。世界の存在と（画家としても見た）自然の崇高美、比較解剖学者として接した生物の精妙極まりない構造、多様な生命体の進化と動物性を超えた理念認識にまで到達した人間の出現、人間の心性の複雑さと無意識的諸現象のダイナミズム、当時のことばに言う「自然の昼の面」と「自然の夜の面」のすべて、こうした事々への驚異の念を、カールスは素直に受け止め、またその全体を関連づける全体論的形而上学の確立を目指した。

カールスは、全実在を生ける統一体と見るとともに、それを「神的なるもの」Ⅱ「存在する世界」と、「生成する世界」の二つの存在層に分ける。「イデー」は「神の思考内容」とも言われ、質料因である生成する世界に形相として规定的に働く。この結合体をエーテル実体が支えて時空間と物質性ある宇宙や自然世界が生じ、その中で生命の発展史（Ⅱイデーの展開）が生起する。人間はその精華として、神的なるものの間接的認識（例外的な場合には直接的体験）が可能な存在として出現した。人間の魂Ⅱ心性は、地上の生命体としてはもっとも明晰な意識性や反省性をもっているが、他方で忘却し抑圧した心的内容から成る無意識、心性を支える身体は無意識的作動、その根底にある物質性一般や「生成する世界」の無意識的生命、人間が認知しえないという意味でのイデーや神的なるもの自体Ⅱ「絶対的無意識」など、多重的な無意識の基盤のうえで機能している。人間の魂は、その現象的現れを超えたイデー的存在性をももち、全体生命の一部として死後も失われることはないというのが、カールスの認識である。「プシユケー」は、言うまでもなく、氣息、生命を原義としている。

こうした思想枠組みにある種の経験的基盤を与えたのが、一八世紀末からヨーロッパ社会に治療術として流行し、次第にさまざまな心的解離や超心理学的事象を引き起こす催眠トランスの実践Ⅱ実験として哲学者たちの注目をも集めるようになったメスメリズム（別名「動物磁気」「生命磁気」）である。フィヒテ、シェリングなども

そうした実践の現場に足を運んだが、カールスは医師として、より密接にそうした事象を観察する立場にあった。この面でのカールスの考察の集大成が一八五七年刊の『生命磁気とそのマギア的作用一般について』(*Über Lebensmagnetismus und über die magischen Wirkungen überhaupt*)である。なお精神分析との関わりでは、カールスが意識内容の忘却と抑圧、その無意識内における存続、治療場面における転移関係の意義などについて、フロイトを先取りしていたとの指摘もある。

ヘーゲルとショーペンハウアーを総合し、またカールスらロマン主義心理学をも土台として書かれ、一大センセーションを引き起こしたエドゥアルト・フォン・ハルトマンの『無意識の哲学』(*Philosophie des Unbewußten*) (初版一八六九年)が出たあと、ドイツ自然哲学・形而上学の時代は終焉へと向かった。シャルコー、ベルネームらにおいては、催眠療法は形而上学からは切り離されたが、なおカールスは意義ある存在として影響力をもっていた。しかし両者のもとで学んだフロイトは、催眠療法を放棄して自由連想法に切り替え、無意識心理学をいわばリセットし、無意識の発見者を僭称した。こうしてカールスは思想界から忘却されることとなった。ユングは、ごくわずかにカールスの名に言及するのみだが、その普遍的無意識や元型の発想がカールスを有力な淵源としていることは、今では周知となっている。

一九二〇年代から三〇年代にかけて、特異な心理学者・性格学者であるルートヴィヒ・クラージェスがカールスを生の哲学のバイオニアとして高く評価し、『プシケ』の短縮版を編集・刊行した。またクラージェスの弟子にあたるクリストフ・ベルノウリやハンス・ケルンが、カールス研究やカールスのアンソロジーを出版するなど、カールス復権の動きもあった。しかしクラージェスの反ユダヤ主義的言動や、とりわけケルンによるドイツ民族主義宗教運動とロマン主義心理学との結びつけなどが災いしたこともあり、第二次大戦後はふたたびカールスは忘れられた存在となった。もともと近年は、カールスを含めたロマン主義周辺の深層心理学やエソテリシズムに関

わる思想史的研究がある程度活況を呈し、また二〇〇九年にはドレスデン国立美術館で「カール・グスタフ・カールス―自然とイデー」と題する絵画・資料展が開かれ、二巻本の大部のカタログも刊行されている。

【凡例】

- ・ 本訳の底本は、*Psyche, Zur Entwicklungsgeschichte der Seele*, 2. verbesserte und vermehrte Auflage, Stuttgart: C. P. Scheidin's Verlagsbuchhandlung, 1851 年。
- ・ 太字体は、原文強調箇所である。
- ・ 「魂」の原語は、*Seele* であるが、この語は「心」「心性」とも訳しうる。訳し分けることも不可能ではないが、いずれにせよカールスの言う心性は神的イデーにまで繋がる生命実体でもあるので、「魂」の訳語で統一した。一箇所「心性」と訳した箇所の原語は *Psyche* である。
- ・ 原文の注は脚注とし、訳注は文中に挿入した。

プシュケー―魂の発展史のために―

カール・グスタフ・カールス

目次

I 魂の無意識的生について

II 魂の意識的生について

- a 人間の組織の最初の形成過程の本質について
- b イデーの無意識の作用によりなされる最初の組織のさまざまな系への分化について
- c 種の内部で個体が多数化される諸過程における本質的に無意識なるものについて
- d 自己自身を意識化した魂において常になお無意識の領域に属するものについて
- e 無意識的な魂の生において病的な状態の際に生じるものについて

a 無意識からの意識の最初の形成について

(1) 動物における魂の形成について

(2) 幼児における魂と精神の形成について

- b 魂の無意識の生による魂の意識的な生への継続的な制約について
- c 意識的な魂の生がいかに無意識的なそれに作用する仕方について
- d 意識的な魂の生の無意識的なそれへの還帰について
- e 生の内化と外化による魂の生の生長について
- f 魂の人格と性格への形成、および魂の多様性について
- g 魂の生のさまざまな発露について

① 感情の歴史について

III

魂の無意識と意識における過ぎゆくものと永遠なるものについて

- (1) 喜びの歴史
- (2) 悲しみの歴史
- (3) 愛の歴史
- (4) 憎しみの歴史
- (5) 心情の平静状態について
- ② 認識の歴史について
- ③ 意欲の歴史について
- h 魂と他の魂、自然、神との関係について
 - (1) 魂と他の魂との関係について
 - (2) 魂と自然との関係について
 - (3) 魂と神との関係について
- i 魂の健康と病について
 - ① 魂の健康について
 - ② 魂の病について
 - ③ 精神における病的現象をめぐる特別な考察

意識ある魂の生の本質を認識するための鍵は、無意識の領域にある。すべて魂の秘密の真なる理解が困難であり、不可能とも見える所以は、ここから明らかとなる。意識的なもののなかに無意識的なものを見出すことがまったく不可能であるならば、人間はみずからの魂の認識、すなわち本来の意味での自己認識に至ることを諦めねばならないだろう。しかしこの不可能性がたゞうわべだけのものであるならば、魂の学の第一の課題は人間精神がいかにしてこの深みへと降り立ってゆくかを詳述することにある。

とはいえ、これを試みるまえにまず考察しなければならないのは、無意識的な魂の生は、一体どの程度まで実際に意識的な魂の生の基盤であるのか、との問いである。

私たちの魂の生の領域の圧倒的に大きな部分が、持続的に無意識のうちにあることは、内的生を一瞥しただけで分かる。私たちはつねに、ほんのいくつかの少数の表象を現に意識している一方で、幾千もの表象を保持しているが、それらはまったく意識から遠ざけられている。それらの表象は、その瞬間には意識されていないものの存在しており、したがってここから魂の生の大部分は無意識の夜に属することが理解される。のちに表象生活の注目すべき循環について述べる——これを私は、『生理学体系』において最初に心理学のうちに導入した——が、そこで私たちは、魂の生がこの点では絶え間なく前へ前へと渦巻いてゆく大いなる流れにも喻えられることを認識するだろう。この流れはただいくつかの小さな場所においてのみ陽の光に、すなわち意識に照らされるのだ。したがって、私たちの意識の大部分の思念が繰り返し無意識のうちに沈み、折々に、また個別にのみふたたび意識にのぼりうることからしても、無意識の魂の生は意識的なその基盤であると特徴づけられるのである。しかも、この関係は、なおはるかに深いところまで届いている。すべての魂の生、私たちの最も内奥の精神的現実存

在の世界の総体を、私たちはみずからの意識においてあらゆる外的なるものから区別するが、その魂の生は意識なき生のうえに置かれており、後者のなかから形をなし、現れるのである。私たちの自己意識的な精神生活全体の生育をほんの一瞥するならば、いやが応にも、その精神生活が徹頭徹尾、とつくに私たちにとっては存在せず、つとに無意識の沈んだ表象や思念の基礎のうえに成り立っていることに気づかざるをえないだろう。幼い子供のとき、精神的な発達を遂げるために、私たちはそのときには不可欠であった表象や表象の帰結によつてものを考えることを学ぶが、それらの表象は今や私たちからはまったく消え去った、失われたものであり、またそうでなければならなかった。なぜなら私たちはそれらをもう必要としないからであり、そうした表象からまた新たなものが発展してゆかなければならないからだ。かつて意識的であったものは、こうしていまや無意識的なものとなったのだが、しかしだからといってそれが私たちの現在の意識の根底をなすことに変わりはない——したがって人間の魂が次第に成長してゆく仕方について私たちが確たる見通しを得られない限り、魂の生の秘密に迫ることはできないだろう。これについては、とりわけ三つの大きな生命期を確認しておく必要があるだろう。人間はすなわちまず、

- ・ 単なる微小な原細胞として、同心円を描く外被からなる卵子として出現し、次に
- ・ 卵子のうちに成長するもの、すなわち胎児となり、最後に
- ・ 本来の人として、現れる。

最初のものは、健全な母体の組織のもつとも隠された深みに誕生以来具わっている胚の、まったく潜在的な生存であり、母体の生となお切り離すことはできず、いかなる生命的变化も認めえず、数十年のあいだを通して常

に同一のままにとどまり、したがってそこには当然ながら高度な魂の生の表出の痕跡もまったくなくない。そのうち、母体のそれとは反対の男性の魂による固有の生命的働きかけにより目覚めさせられると、**第二の**、母体内で成長する子供の生命期が始まる。その最も固有の、無意識的な本性の瞠目すべき内的諸法則に従って、元来は単純であつたものが諸対立へと分節し、限りなく豊かな人間形成が形をなし、拡大してゆく。とはいえ——この形成はなお、成熟した人間の形成とは、非常にかけ離れている。

卵子のうちに芽生え、外被により覆われた胎児は、その後々の外界との相互作用のために定められた器官をなおすべて外被のうちに向けている。この生命期において胎児はこうした状態にあり、この卵の生み出したものに何らかの意識の目覚めを示すものは何もない。したがって私たちの成熟した魂のうちには、この生存の何らかの記憶、私たちの第二の生命期の想起と呼びうるものは、皆無である。神の火花の、かの内的な原像のあらゆる現実存在、あらゆる作用はなお自己を観るまでには目覚めておらず、今はなおただ秘密に満ちた創造作用をなすものたるにとどまっている。この創造的なものは、無意識のうちにあるとはいえ、このうえなく英知に満ち、驚くべき法則に従って、先へ先へと**形成し、形づくる**生命である。この生命は、それがより明瞭に認識されるならば、より一層心性の高次の啓示の奇跡の理解をもたらすものであり、これについては拙著『*Physis. Zur Geschichte des leiblichen Lebens*, 1851』において叙述したところである。同書は、本書を徹底的に補足するものとして書かれている。

第三の、本来の人間としての生命期は、誕生とともに始まり、その有機組織をもつて今や広大な外界と多様な相互作用のうちに立つとともに、次第に暗い、それまで意識を欠いていた魂の領域に、自らの存在と外なる存在とのあいだのかすかな区別が兆し、そして徐々に、また周期的に無意識的な生命へと沈むことを繰り返しながら、生の成熟が近づくとともに、意識的な、感じ、意志し、認識する魂が、それ以前の意識なき状態から発展してく

る。

以上が、人間として、魂としての私たちの発展の本質のごく簡略な概要である。私たちが厳密にこれに関わる認識にこだわり、これについて何らかの恣意的な考えを付け加えることを戒め、私たちが忠実かつ忍耐強くみずからのうちに観入り、そして——このように私は言いたいのだが——私たちの意識的な存在から無意識へと遡って**私たちの現実存在を精神的に再構成するとき**、そのときにのみ、私たちは本書の冒頭で意識的な魂の生の認識への鍵と呼んだものを見出す望みをもつことができる。すなわち、**意識を通じて無意識を理解する**、ということである。このような考察方法は、困難ではあるが、しかし不可能ではない。その際私たちは、身体的なものについてと同様の手順で、精神的なものについても考察したい。すなわち、自身が生きてきながらも知るに至っていない有機組織的展開を、私たちは自分以外のものの観察によって考究し、知るに至る。本研究においても、私たちはこの方法に従うことにした。

昔日の探求者は、アリストテレスをはじめとして、人間の意識無き分節化と発展の組織的過程については、なおほとんど知見をもたなかったが、近年の研究者とくらべてはるかに忠実にこの方法に従っていた。彼らにとつては、魂は常にまず生命あるものを構築し、形成し、養う存在であり、その存在のなかでは、認識はいつものちになって初めて発達するものであった。アリストテレスは素晴らしいことばを残している。曰く、「**魂は、おのずと分化してゆく身体、最初の実在である**」³⁰。

こうした教えのうちに錯誤と不調和が入り込んだのは、人が生命と魂を分離し、そして生命そのものについて混乱を極めた概念を持ち込んだことに始まる。一七世紀終りのF・ホフマン〔Friedrich Hoffmann, 1660-1742 ドイツの著名な医学者〕の生理学的見解によれば、植物は心臓を持たないので生命ではない。こうした見解が当時支持を得たことを考えるならば、動物に魂があるのか、子供にいつ魂が外から宿るのか、などといったことが論

争の種となったことも分かるし、またいわゆる生命力なる機械仕掛けの神を考え出して、その全能性のうちから生体が成立し自己維持し、その一方で魂はあとからこの外被に入り込んだ異物に過ぎないと見なされねばならなかったことも理解できる。これはまた明らかに部分的には、暗冥な精神の持ち主の誤解に基づく神学的観点によるものでもあった。つまり、私たちの内で感じたり思惟したりするものがまた私たちの形成と生長作用をも司るとの考えを、こうした結びつけは、魂の不死性を主張する根拠を不可能なものとする冒瀆である、とこの観点はみなしたのであった。このゆえに、私たちの身体の組織が発展するためには、魂以外のものが活動しなければならぬと考えられたのであり、また動物には、すくなくともより未完成なそれには魂があるのか否かという問いも生じ、さらには植物にはほとんど生命をほとんど認めがたいとしたために、植物魂など問題にならないとされたのである。こうした過去を思うにつけ、より以前のはるかに厳密な神学者——ここではトマス・アキナス^{III}を挙げるにとどめるが——のことを思わざるをえない。トマスは魂に、ひとつの方向から見れば終極的なもの、すなわち認識を帰するとともに、同時に他の方向では第一のもの、すなわち生長作用と形成を認めることに、何らの抵抗も覚えなかったのであった。というのも、こうした神学者たちは、彼らがあらかじめ次のことを予感していたがゆえに、そこに不死性の教説との矛盾など見なかったからである。その予感とは、私たちが死と呼ぶものを通じて、ともかくも組織形成とともに規定してきた魂のうちに生じるのは、魂の生の単なる変容、すなわちそのひとつの方向の終息というだけで、決して魂の根本的イデーのまったき消滅なのではない、というものであった。

しかしながらこのこと〔魂と生命との分離〕は、魂を身体 of 自然な分化の最初の実在として認めることを妨げた理由の一端にすぎない。他方においては、無意識的なものと意識的なものとの間を分ける壁こそが、全く意識の外にあるものを魂の領域から切り離してしまうようにと人々を促したのだ。つまり私たちは、自分がいかに発

生し、いかに生長し、内的にいかに養われ、また作り変えられたかについては意識をもたない一方で、私たちのうちにある感覚印象や表象や意志作用と呼ばれるものについては意識があるために、私たちは後者の諸過程だけが本当に魂に属するものだと考え、これに對し他のすべては魂では説明不可能なものとして、何か特別な働きかけ、特殊な知られざる潜在力、いわゆる生命力に帰してしまふのだ。

意識、明澄な思念、あるいは少なくとも明瞭な感覚表象を持ち、またそれによって規定される能力を暗黙のうちに魂の信任状とすることに誤りはないとされたため、こうした能力を欠いたものは魂と見なされえなかったのである。

しかしこうした錯誤に身を委ね、身体組織の形成と生長の過程のために固有の生命力を想定し、また感覚と認識と意欲のために固有の魂を想定することはどのような結果を生み出しただろうか。人は**二つの異なる魂**、あるいは**二つの本質的に異なる根本的力**を、その生成からしても、生命のあり方からしても、自己感情においても一体であることが否定しえないものに持ち込んでしまうこととなったのだ。その何ものかを生命力と呼ぶにせよ、形成衝動と呼ぶにせよ、常に、またそのあらゆる外化において、それは外から動かされるものではなくそれ自身の中から動くものでなければならぬのであり、そうなるたまさにそれは神性に与るものと言わねばならないこととなる。なぜなら神的なものはいずれにおいても、動かされることなく、自分自身の内から自分自身と他のものとを動かすというのがその特性だからである。魂そのものについて、本質的にこれと異なることを言うことはできないのであつて、もし生命力と魂との間の關係について堅持しようするような区別にたどり着くためのメルクマールを求めるならば、永遠の循環に陥ってしまうことが容易に見て取れる。生命力は、それを微細なものと考えようが、あるいはより粗大なものと考えようが、つねにそれ自身からのみ動くものであり、個別的なものであり、神的なものの氣息によってのみ駆り立てられるもの、一言で言えば、魂たるにとどまる。魂を思考の

うえて触知しうる組織からいかに切り離そうとも、また有機組織的な生と呼ぶものから区別しようとも、私たちの意識においてそれはこの上なく精妙に私たちの生のあらゆる形式と結びついて現れるのであり、それゆえ実際に生理学者の中には、結局のところ魂は単に高められ、そのもつとも高次の作用性として表れた生命力にほかならないとの自然な仮定へと行き着いた者もいた。神のイデーそのものによる生の創造の無くしてはいかなる生命力もないし、またありえないということを洞察するや否や、これに対してはいかなる反論もなしえないだろう。

私たちの全存在の根底にある本質の**二元性**ならぬ**一体性**を把握し、また精確に証示するためには、これに加えて、なおもうひとつのことがさらに注意する必要がある。すなわち、魂と、形成し養う生命の諸過程を条件づけるものとの差異を証明することとして、その生命から意識へと到達するものなどないとの事実を引き合いに出すのならば、次のことが忘れられている。つまり確かに身体組織のうちで生じることの多くは、それそのものとしてはあるのまま直接に意識に達することはないが、しかし身体組織で生じること、少なくとも間接的に意識に影響を及ぼさないことなどないのである。胎児のときに身体組織が成長・成立する際の、まったく無意識になされた諸過程でさえもみな、意識と関係があると言えないだろうか。なぜならそれらの諸過程は、やがて表象を受容し、保持し、変容せしめる諸器官を創り出すのであるから。このことは、意識的となった人間における部分的に無意識的な諸過程としてのちに言及する、血液循環や成長や分泌などについて、より以上にあてはまる。なぜならそうした諸過程は、人間の意識に**間接的に**影響を及ぼし、また病的状態においては直接的に意識の表象しうるところとなる場合も多いのではないだろうか。——こうした関連からしても、魂と生命力との間を隔てる不動の壁を探すことがむなしいことが分かる。もしこれら両者のエネルギーが本当にあらゆる意味で異なるものであるとするならば、感覚器官が受け取ったものが精神に働きかけ、精神そのものはまた身体の形成に作用するなどということは、そもそも不可能となるであろう。それと同じように、すべてのことが**次の点**を示唆していることは

確実であろう。つまりただ唯一の生けるものの原理が、自己自身からみずからを動かすものだけが――アリストテレスがエンテレキーと呼び、プラトンがイデアと呼ぶもの、プシケ、魂など何と呼んでもいいが、一言で呼ばば**神的なるもの**――あらゆる生命現象の、したがってあらゆる形成作用の根本的条件たりうるのだ。

この際、この秘められた生の原理にたいしては、呼吸や氣息を意味する言葉、たとえば *anima*、*spiritus*、*pneuma* などが当てられることがほとんど常であることに注目がなされ、またそこから、もつとも持続的で休みなき生命現象としての呼吸にこの比喩的名称は由来するのだと信じられてきた。私はこれに加えて、こうした名称の選択には、なお別の意味もあるものと推測している。すでに『創世記』の非常に注目すべき箇所「その鼻に息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(『創世記』二・七、新共同訳)は、明らかにこの意味で言われており、また「靈感」「靈感を受けた」などもここに関係づけることができる(ともに原語は *spiritus* と語源的に関係している)。こうした表象の仕方は、次のような考え方と非常に見事に結びついている。すなわち、生命あるものからまたこの神的氣息は聞き取り可能な形で、行為と言葉における神的なものとして再び響き出てくる――貫き響いてくる――(古代の俳優の聲が仮面の下から出てくる *per-sonare* ように)のであり、そして生命あるもののみが、私たちに高次の聞き取り(理性)〔ドイツ語の「理性」= *Vernunft* は「聞き取ること」をも意味する〕にみずからを規定せしめる個人の、つまりは**人格** (*persona*) の概念を与えるとの考え方である。

こうしたすべては、次のことを示唆する。すなわち私たちはすべて何らかの生けるもののうちに、一なるもの、命あるもの一般を規定するもの、命あるものの現実の根底であるものとして、**神的なるものを認める**。この神的なるものを、私たちはこの特有の現象の根元として、**その存在のイデー**ないし(このイデーのうちに何らかの種類の意識が芽生えるや否や) **魂** の名をもって呼ぶ。

現実には決して分かれることがありえないものを思惟の上で分けることを可能とする私たちの精神の能力は、

あらゆる存在において、アリストテレスが語るような区分を行うことを許す。曰く、「一方には質料があり、それ自体は何らかの規定された何かではない。他方には形相と形象があり、これによってある何かは名づけられる。そして第三に、形式ないし形象から成立するものがある。質料とは可能態であり、形相規定は現実態である」。かくして生命ある存在、すなわち自己自身より展開し、保持し、栄養摂取し、運動する存在が問題となるときには、私たちがその個別的存在の根底と見なしたあの神的なるものによってまず規定されたものは、つねに形式であろう。アリストテレスが正しくも対象の**現実態**と形容する形相＝形式規定は、確かに絶えず修正されながらも、本質においてはあの神的なるものによって生の全体を通じて堅持され、残存するものと見える。一方これに対しアリストテレスが**可能態**とよぶ**質料**は、絶えず変容し、つねに流失するものであり、いつも他のものによって補われねばならないものである。個別存在の根元を包含する神的なるものをイデーないし原型と呼ぼう。このイデーがそこに映ずる、つまり現象する可能的なものは、質料ないしエーテルと呼ばれよう。さらに、イデーが心魂的かつ身体的に生きる現実態は、形体と呼ぼう。こうして私たちはともかくも**ひとつの生ける存在に三つの契機**を認めたことになる。その際注意せねばならないのは、私たちはこれらを悟性においてのみ異なるものとして区別できるのであつて、それらの間の客観的な分離ということは断じて想定してはならない、ということである。そこにみずから刻む何らかの質料なき形相や、イデーによる規定なき形体などというものは考えられない。何らかの形体無くして端的に存在する質料などというものもまた意味をなさない。何らかの形体において活性化し、写し取られないイデーないし原型は、そもそものいかなる存在ももたえない。まさにそれゆえに、イデーがそれ自体はありえないこうした区別を**思惟**しうるに至るということは、みずからを認識するイデーの最高の発展と見なされねばならない。またまさにそれゆえにまた、こうした思惟には大いなる危険がともなわれる。なぜなら、極めて容易に、人間はそうした思惟に何らかの現実性を与える誘惑にかられるからである。そうした際にはそれに

よってただちに世界や人間自身についての混乱した、まったく不十分な表象が抱かれてしまうのだ。

こうした考察において同時に、まさに本来的に**人間的な**、あらゆる学問と生命との関わりにとつて、明瞭かつ光明を与えるような立場が見出される。なぜなら神的なものが、自己自身からみずからを動かし、発展するものであるということは、私たちの精神の最も内奥の本質と、世界およびすべての生けるものの観察が私たちに告げるからである。それと同様に確かなこととして、それらは私たちに、質料なるものがあり、それが幾千もの形体において私たちの内的・外的諸現象を規定していることを告げる。そして質料によつて私たちは、私たちの思惟のより明瞭な展開に向けて、あの元来はそれ自身永遠に一体的な至高の神的存在の諸契機を精神において区別して把握し、名づけることが許されることとなる。そしてこのようにしてなされる限りでの實在からの抽象は、私たちに近づきうる形而上学の真の領域である。これに對し、こうした区分を超えてゆくもの、神的なもの——絶対神——の精髓の至上の様相を、世界現象というかたちでの啓示へのその止みがたい傾きにおいて規定し、説明しようとのあらゆる試みは、つねに**直接的な認識**をまったく欠くこととなるだろう。そしてその試みは、ある種の仕方で、揺らめく、霧のかかった、**不毛な領野**でみずからを見失うことともなるのだ。

以下の探求は、先に私が示した立場を貫こうとするものである。すなわち、**神的なものを、私たちの内部でそれが無意識から意識へと展開するありさまを追う**ことが、以下で私たちが行う事柄の本質なのである。そして私たちはもういちど断固としてこのように言おう——意識ある魂の生の本質を認識するための鍵は、ただ無意識的なものの領野においてのみ見出されるのだ。

編集後記

鶴岡賀雄

ヘルダーリンを読む会に誘われた事情は本誌所載の拙文に記したところだが、同人誌への展開も当然鎌田さんの発案で、凡人の発想を超速で越えていく構想力には今回も驚かされた。が、引っ張られてついていくと、ひとりでは絶対行けないところまでいつも連れて行ってくれる。今回もそうだった。共同編集者というのは名ばかりで、編集の実務、作業は鎌田さんが一人でやってくれている。ありがとうございます。ときどき津城さんを交えた三人で詩と宗教をめぐる雑談まじりの研究鼎談をオンラインでやっていて、そこでの気儘な発言が刺激やヒントになってくれれば、わずかに「名ばかり編集人」としての責めをふさぐことになるうか、と思っています。

津城寛文・匡徹 この雑誌の出発点である、「ヘルダーリンの詩を原語で読む」というオンライン研究会の通知メールが、主宰者から多くの〇〇であったとき、反射的に「これは私には無理だな!」と思った。返信せず放っておいたら、しばらくして「ぜひ」という名ざしの追伸があり、ドイツ語もともに読めない身で、好奇心半分、羞恥心半分、参加者の末席に連なることになった。結果的には、とくにハイデッガーのヘルダーリン論が、現在進行中の論考にとって、たいへん参考になった。創刊号は、論考から、創作、翻訳、解説まで、最先端の話題が目白押しで、読者は、目眩めく思いになるだろう。今回は寄稿しておられない、加藤敏先生の「狂気内包性思想」論も、次号（以降）でさらに展開していただけるのを、楽しみにしている。

鎌田東二 ヘルダーリンの「カミナリ」に撃たれた。ただその一言に尽きる。わが脳髓に天宙から「カミナリ」のエネルギーとメッセージがたらぬき充ちた。そこからヘルダーリンを改めて読み始めたら、ビンビン、ガンガン、グングン来るではないか。これは何? 何事? 何者? 何ゆえ? というわけで、2023年9月にヘルダーリン研究会を結成し、このたびヘルダーリン同人誌『あごら』を創刊することになった。その編集作業は鎌田が一人で務めているが、目に見えないいろんな手助けをかんじている。ありがとう。大感謝!

付録

歌謡詩劇「ロックンロール神話考Ⅱ 2024 末法篇」

鎌田東二

原作・脚本・鎌田東二（本作は、1970年に作上演した「ロックンロール神話考」を改作したものである）
演出・芸術監督・レオニード・アニシモフ

制作・主演・劇団ノーヴィ

上演・2024年12月（を期待しているが、無理なようだ）

出演者

おのごろ村の住民3人

- ① 良夫（よしお）
- ② 悪売（あくめ・女性）
- ③ 流太（りゅうた）

狂言廻しⅡ天気予報官・天気見太郎（てんき・みたろう）

イザナギ

イザナミ

少年少女探偵団員

① ルリア（少女）

② ジョバンニ（少年）

③ 都留女（とどめ、少女）

④ 鯉太郎（こいたろう、少年）

⑤ Oer・クイア（性同一性障害の少年・少女？ 異星人？ 宇宙人？）

異星人

① ニーチェ

② 空海

③ おつる（阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」）

④ マッチ売りの少女こと実はモッキリ屋の少女コバヤシチヨジ

⑤ 番場の忠太郎

⑥ デロリンマン

⑦ 宮沢賢治

序幕

日本列島のどこかにある「おのごろ村」

悪売「商売、あがつたりだよ。こんな、お天気じゃよう。作物も、売る物も、盗る物もなんにもねえ。干上がっちゃったよ、もう。どうなってんだ、この世はよう。もうお手上げかい？」

良夫「アクメよ、そんなときだからこそ、おらたち、いっしょけんめい、おてんとさんのしたで、がんばるんだよ。笑う門には福来たるだよ。わはははは。わはははは。ワー、ハッ、ハッ、ハッ！　がんばるべー！」

流太「とはいえのう、ヨシオよ。おらたち、もうなにをしてもダメなんじゃねえのか？　なにをしても、なにもできねえよ。アクメが言う通り、おれたち、干上がっちゃったのさ。」

むかしむかしあるところに、不思議な樹と巖（いわ）と泉があつて、それぞれ、実に立派な威厳をもつて、互い自慢をしてだんだって、さ。

俺は、世界一高い樹だぞ、僕は世界一大きな堅い巖だよ、わらわは世界一きれいでおいしい水の湧く泉よ、と、ね。

だがそれも、いつしか、樹は斬られて家や机や椅子になり、巖は割られていろんな道具にされてしまい、泉は汲み尽くされて、もう水一滴も残されていない、だと。

そんな世の中になってよう。この世は「末世だ、末法だ！」と叫ぶ荒法師たちが跳梁跋扈するようになってさ。もうみんな、世も末じゃ、親が子を殺し、子が親を殺し、あらゆるものが殺しあう、手のつけられねえ世の中になっちゃったのさ。」

悪売「リユウタの言う通りさ。もう、どうにも、こうにも、手がつけれないのさ。」

良夫・悪売・流太「かみさま、ほとけさま、ごせんどさま、まんまんちゃん、なんとかしてください！！！！おねがいっす。おねがいします！」（と叫ぶ）

——そこへ、狂言廻しの流浪人の天気予報官・天気見太郎がやってくる。

天気予報官・天気見太郎「ぼくは由緒正しき天気予報官です。国際天気庁の事務次官まで務めた大変優秀な天気予報官であり、天気情報収集官でありました。

でも、去年、コロナ制約が解除され、それとともに突然、われらの仕事も解除解約されてしまったのです。

もう、この先、天気予報の仕事がない、と判断されたのです。なにしろ、天気がないのですから。嗚呼、かなちなあ。

かくして、国際天気庁は解体。各国天気予報官は、みんな、てんでバラバラ。各地に散っていきました。そこで、どうしているか、もはや消息不明でござります。」

「悲の岬」（を朗詠）

月光是黄泉路を越えてきた。満月を串刺しにしたまま血を舐めている処刑台の山猫は何に向かって吼えているのか。月夜に還ってゆく何処の島がある？ 故郷への道は塞がれたまま魂の難民は国境線で不安と恐怖の夜に怯える。全世界を覆う電脳もこの怖れの暗渠をほぐすことはできない。絶対零度の深海闇夜。癒しなどどこにもないのだ。救いがあるとすれば無力に震える独りの夜を無為に過ごすのを見届ける自己があることのみ。深遠を呼び

覚ますモノが存在するとしたら黄泉路を越えて自己を突き通す無限遠点のまなざしと意思を植えたこと。超越の波動が悲の受精卵を苦の岬から突き落とす。満月に向かって悲しく聳え立つ母之理主（モノリス）よ、応答せよ、応答せよ、応答せよ！

「探すために生きてきた」（狂言廻しの天気予報官を中心におのごろ島村人々とともに歌う）

へ探すために生きてきた 道を求めて生きてきた

夢を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	果てしない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	切りがない
1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	とめどない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	道がない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
時を求めて生きてきた 闇を潜って生きてきた

1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	果てしない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	切りがない
1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	とめどない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	終わらない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
路を求めて生きてきた 夢を求めて生きてきた

1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	果てしない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	ときがない
1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	あてがない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	0	みちがない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 道を潜って生きてきた
愛を求めて生きてきた・・・

天気予報官「今日は朝から曇りのち晴れ。山間部ではときどき小雨も降るでしょう。時には、カミナリも鳴り響くでしょう・・・（と言っている間に、感極まったのか、しくしくと泣き始める）・・・みなさん、もう、そんな牧歌的な天気予報はできなくなってしまいました。みなさん、天気は死にました。みなさん、天気は死んだのです。わたしたちが、わたしたちが、殺してしまったのです。」

「みなさん、天気は死にました」（天気予報官が朗詠）

「みなさん 天気は死にました」

と 高校三年生の田村君は 言った

その田村君は 生きているか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物

林檎よ

縁は異なものの味なもの

そのとおりだが

でもね

死んだ天気も 縁次第

そのように なって そのように ある

あるべくして ある なるべくして なる

世界はそのようにうごいている 縁はそうにはたらいっている

1ミリ1センチたりとて恣意的ではない

成るべくして成る 在るべくして在る

ありをりはべりいまそかり 青森カルシウムはどこ行った？

白田甚五郎は飛びのいた 大森から青森まで

その飛躍こそが猿樂芸能 天狗舞 マイトレーヤ

そは如是我聞 聴くべき耳を研いた 研磨研耳

いかつこなく いかしまぐはひのごと

弘前に 花折れて立つ

やつかみみ はしぬれど ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った 恐山にて

津軽三味線の 音律たかあま ぐひのみこと

だがされど されど木島 みやこじま

いつまで封せど ねこばばの

影落ち延びて 地に臥せり

やつがれは しとどぬれて

大河の一滴まで のみほした

ぬれおちど　ぶちそいど　れおなると　はれおから　ひとしずく

はれほれ　みれをれ

行き場なし　溜り場なし　咲き場なし　馬場愛なし

そうだとしても

すべてをいれて　すべてをすてて

本日早々

みなさん　天気は　死にました

みなさん　天気は　死にました

みなさん、天気は、死にましたー！！！！
(全員で)

第一幕 イザナミ・イザナギの子探し

子どもがどこに行ったのか？ 何をしているのか？ わからない。子どもの行方を捜す。

天気見太郎「（最初だけ、祝詞調で）掛まくも畏きイザナギ・イザナミの大神たち。あなたたちはいづこにいますや。この死に給うお天氣様をどう見そなわしますや。日の本の生みの親たるイザナギ・イザナミの大神たち。あなた様のお声が聴きとうございます。」

イザナミ「（横目で、奇妙な姿の天気見太郎をチラと見ながら、目の前にいるかつての夫に向かって）イザナギよ、久しぶりじゃ。相変わらずの（あなにやし、えをとこ！）じゃのう。いい男じゃ。しかし、おぬしとふたび会うのは、萬代（よろづよ）を経てのことじゃ。

氣の遠くなるようなむかしむかし、われらも夫婦（めおと）じゃった。けなげで、いとおいしい、日の本最初（はじめ）の夫婦（めおと）じゃった。われがはじめにおぬしに声をかけたがために（ひるこ・あはしま）ができて、子の数に入れずとなってしまうたが、その（ひるこ）も（あはしま）もだいいな大事なわれらの子じゃった。そのことを、しっかりと、天つ神々に伝えることができないほど、われも幼くもの知らずであつた。

今となつては、そのことは、間違ひであつたとは思つてはおらぬ。間違ひでもなんでもなく、むすひの自然（じねん）のままのことじゃった。だから、そのまま受け入れればよかったのじゃ。われも未熟じゃったのう。だが、おぬしもじゃ。イザナギよ！」

イザナギ「イザナミよ、まことに久しぶりじゃ。元氣そうで何よりじゃ。昔のことを変えることはできぬが、わ

れも幼なかつた。おまえの死を受け入れられなかつたのじゃ。許してくれ。おまえは今も〈あなにやし、えをとめ〉じゃ。〈あなにやし、え、をとめ〉ぞ。そのことをずつと詫びとともにおまえに言いたかつたのじゃが、手立てがなかつた。すまぬ。すまなかつた。われの未熟ゆえ、おまえにおおきな〈辱（はぢ）〉と悲しみと怒りを与えてしまった。われの愚かさであり、未熟さであり、至らなさであつた。ここからおわびする。今となつては、遅いかもしれぬが・・・」

イザナミ「そうじゃ。遅すぎたぞ、イザナギよ。時が経ちすぎたぞ。その間に、われらの生みし子どもたちがどうなっているのか、見えぬままじゃ。イザナギよ、罪滅ぼしに、われとともに、われらの子どもや孫や子孫が、どのようになっているか、どこで、何をしているのか、見に行こうぞ！」

イザナギ「おう！ よろこんで、お供するぞ。〈あなにやし、え、をとめ〉よ！ イザナミよ！」

イザナミ「イザナギよ、われらは新婚旅行なんぞ、とてもじゃないが、できる時代じゃなかつたのう。神代（かむよ）の昔じゃもん。ともに、天の浮橋に立つて、天つ神から授けられたアメノヌボコを塩コヲロコロに掻き混ぜて、おのずから成つたおのごろ島。そのおのごろ島に降り立つて、みとのまぐはひをして、むすばれて、われが島々を出産し、続いて神々を出産し、こうして、次々と自然万物を産みなしたのじゃ。そして、火の神カグツチを産んで、ミホトを焼いて黄泉の国に身罷る時も、反吐から金山彦・金山姫などの金属神を、ウンチから埴安彦・埴安姫などの粘土神を、おしっこからミヅハノメなどの水神を産みなしたのじゃ。思えば、次から次へ、よう出産したものじゃ。吾ながらようやつたと、褒めてやりたいわ。」

イザナギ「おう！ ようやつたぞ。おまえは。この青人草のニンゲンたちも、元はと言えば、おまえが生み成したものだ。すごいぞ、イザナミ。ようやつた。ようやつた。イザナミよ、大毗（おほは）よ。」

イザナミ「今さら、そう言われてものう。うしくないこともないが、片腹痛いのう。それは、その生み成したわ

が子の末裔がどうなっているか、わからないからじゃ。」

イザナギ「この日の本は、どうやら、縄文時代から、弥生時代、古墳時代、律令時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代、平成時代、そして、令和時代の本年、令和六年となりにけり。よろず年が経ってしもうた。そんな時代のみぎひだり、来し方行く末がどうなっているであらうのう。」

イザナミ「いやいやいやいや、見るまいか、見るまいか。疾く疾く早う見てみるとするか、イザナギよ。吾らが子孫の行く末を！」

こうして、この世巡り、冥界・異界めぐりに出かけてゆくイザナミとイザナギ。

第二幕 少年少女探偵団の親探し

天気見太郎「こうして、日の本元（はじめ）のちちははであるイザナギ・イザナミの大神様たちは、時空を超えて現代の少年少女のもとにまっしぐら。」

（イザナギ・イザナミはこの世と黄泉の境の黄泉つ平坂まで来て、かつてイザナギが道を塞いだ千引の大石のところまできて、少年少女たちの会話を覗き見る。少年少女がやさぐれた理由については各演技者が自由に物語る。）

ルリア「暗い。暗い。暗い。物がよく見えない。みんな、だいじょうぶか？ 近くに集まってくれ。ぼくたちのこの世界は、もう、終わりかもしれない。あたしは、女として産まれたという。もちろん、このあたしを産んだ母もいる。父もいる。北千束のハイソな家だな。」

でも、ぼくは、そんなちちはが、どうしても、どうしてもほんとうの、ほんとうのはちちとは思えなかった。そして、ほんとうの、ほんとうのはちちがどこかにいると、思いつづけてきた。この暗い世の中で生きていくために、ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのはちちを捜しに行こう！」

ジヨバンニ「おとうさんはラッコの上着を持って帰ってこなかったし、おかあさんは死んじゃったけど、ぼくはカインパネルラの星を探しに、もう一回、銀河鉄道に乗るつもりだよ、瑠璃亜（ルリア）。ほんとうのほんとうの、まことのまことのしあわせと父母を探して。瑠璃亜も都留女も鯉太郎も、一緒に往こう！」

（ルリアとジヨバンニが中心となって歌う）

「銀河鉄道の夜」

「この地球から見ると 銀河は白い乳の流れに見えて 夜空を彩る
その夜 ケンタウルスの祭りで ぼくは 不思議な夢を見た
銀河の夜汽車に乗って 星の世界を旅する夢 だった

あの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを 探しに行こう

カンパネルラの星まで ぼくは旅をする
カンパネルラの星から ぼくは飛んでゆく

この宇宙の中で 地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く
その夜 銀河の渦の中でぼくは孤独な星となる
いっしょに行こうと誓ったきみはどこにいるのか教えて 教えて

あの空の果てまで ぼくたち二人で
まことのさいわいを探しにゆこう

カンパネルラの星までぼくは旅をする
カンパネルラの星から独りで飛んでゆく

あの空の果てまで ぼくたちみんなで
まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう

都留女（とどめ、少女）「いい歌だね、ジョバンニ！ 君らしいや。でもね、〈まことのさいわい〉なんて、幻想だよ。そんな夢を追いかけてもむなしく崩れるだけ。それは、ニンゲンの歴史が物語ってるだろ？ ぼくたちは、救い難く、度し難い生命種なんだよ。それにさあ、まあ、実の父母にもこんなものか、と思うし、幻想を持たないよ。本当のほんとうの父母なんていないよ。それ、なに？ って、思わないのかなあ。いい加減、目を覚まさないよ。ぼくたちの現在と未来は、汚穢と絶滅にまみれてるのさ。」

鯉太郎「つたく、救い難く、度し難いのは、都留女、おまえじゃないか。おまえも昔は夢見る少女だったのに。いつからそんな、すれっからしになったのだい？ どこにも、夢も希望もないこの世の中がおまえをそんなふうに変えてしまったのかなあ。」

都留女「何、いつまでも、甘いことばっか、言ってるんだよ。だから、鯉太郎は現実を見ない夢見る男、ドリーマーの恋多郎と言われるのさ。20歳にもなつて、いい加減、目を覚ましなよ。もう、夢見る未来なんて、ありやしねえよ。ただただ、崩れてゆくだけ、滅びてゆくだけ、死んでゆくだけだよ。だったらさあ、つかのま、今だけでも面白いことして死んでいこうよ。ほんとうの、ほんとうの父母なんて、無駄な探訪はきっぱり止めてさ。」

鯉太郎「都留女、絶滅していくから、その覚悟があるから、最後まで夢見るといふ生き方だってあるんだぜ。」

ジョバンニ「そうだよ。都留女、瑠璃亜、ぼくたちは、やっぱり、最後の最期に、ぼくたちの夢と希望を遺そうよ。未来に。」

Qeer（異星人・宇宙人意識を持つ性同一性障害の少年・少女「ったく、ンゲンて、ほんと、やつかいで面倒くさくて奇妙な生き物だな。絶望するし、希望するし、夢見るし。忙しいったら、ありやしない。ぼくは、未来の波留星からやってきた宇宙人だけど、みんなの探検には手を貸すよ。ほかにすることもなしね。でも、これだけは最初に言っておくよ。」

ぼくたちは、どこにも行けるし、何でもできるんだよ。ほんとは。何もできないとか、どこにも行けないと
思っているのは、自分の意識だけ、心だけなんだよ。ほんとは、どらえもんを持っているどこでもドアのよう
に、どこでも行けるんだ。さあ、つべこべ言わずに早く出発しよう！」

ジョバンニ「クイア、ありがとう。みんな、一緒に行こう！ 手を組んで、円陣を作って。さあ、出発だ。Go！」
全員「Go！ 合！ 業！」

「墮天使ロック」 作詞・作曲 つげ春乱（早川義夫）

へ見つめる前に跳んでみようじゃないか
俺たちにはできないこともあるさ

さあみんなでロカビリーを踊ろう

心は変わりやすいけれど

本当はなにもかわっちゃないのさ
まわりだけがぐるぐるまわるのさ

子供の頃は良かったじゃないか
裸でも生きていられたぜ

さあみんなでツイストを踊ろう

ないものねだりだけでも

俺たちの地平線まで

さあみんなでゆこうぜ出発だ

ころがつてゆけくずれてゆけ

堕ちるとこまで墜ちてゆけ

咲いた花がひとつになればよい

見つめる前に跳んでみようじゃないか

俺たちにはできないこともできるさ

さあみんなでブルースを踊ろう

第三幕 異界遍歴 イザナミ・イザナギと少年少女探偵団がともに訪なう

天気見太郎「こうして、現代の少年少女たちは、ほんとうの、ほんとうのちちはを探す旅に出たのです。そして、神代（かみよ）のイザナギ・イザナミの大神様たちも、現今の子どもたちを見届ける時空遍歴の旅に出たのでございました。そして、その結果は如何に？ 如何に？ 如何なるや？」

① ニーチェ

ニーチェ「ツアラトウストラよ、今日も朝日に目覚めた。わが大きな理性たる身体は明晰に目覚めておるぞ。ツアラトウストラよ。今朝はしかし、奇妙な風が、東からも、西からも吹いてくる。

かつて、地球の橋の極東の日本では、東からの風を東風（こち）と呼んだそうだが、「東風（こち）吹かば匂ひおこせよ梅の花 あるじなしとて春を忘るな」と大宰府に左遷されて悲嘆にくれた大宰府権帥（だざいふごんのそち）の菅原道真是歌を詠んだと云う。

風流じゃのう、日本人は。だが、「超人」を説いた吾は違うぞ。ツアラトウストラよ。そんなルサンチマンとセンチメンタルな哀憐に満ちた歌なんぞではなく、もっと明晰な大きな理性の遊戯を見せてくれようぞ。」

（とそこへ、東風に乗って突然少年少女探偵団の面々が現れ、少年少女たちが口々に）
少年少女たち「ここはどこだ？ ここは、どこだ？ ココハ、ドコダ？」（と、探り合う）

ニーチェ「くらやみのなかの迷妄の中にいるようじゃな、異国の少年少女たちよ。

ここは、そうじゃな、さしずめ、地獄の一丁目、吾（われ）が君たちの年齢のころに研究したギリシャの神話

世界ではハーデイスと言った冥界じゃ。吾はその住民となつて、訪れてきた者に、いつ果てるともなく、超人と永劫回帰と大きな理性である身体の哲学を辻説法しているのじゃ。

身体は大きな理性だ。一つの意味を持った複雑である。戦争であり平和である。蓄群であり牧舎である。とな。」

ルリア「どうしてぼくたち、こんなところに来てしまったんだろう。リッパな髭を生やしてもっともらしい理屈を言うおじさんさあ、おじさんはだれなの？」

ニーチェ「東の国からやつてきた異邦人の若者よ、吾こそは後世に、二十世紀の予言者と讃えられたフリードリッヒ・ニーチェである。」

都留女「不倫どぎつい日輪？ ナンダ、そりゃ？」

ニーチェ「若者たちよ、よく聴け。吾は宇宙の声を聴いた。宇宙は超人を求めておる。そして、時間は直線になど流れておらん。永劫回帰するのじゃ。永劫の大車輪を廻すのだ。恐れるな。ルサンチマンも、コンプレックスも、ない。子どものように無垢なのじゃ。ありのままに、子どものように踊れ、若者よ！」

ルリアと都留女「言われなくても毎日踊り狂つてるよ！」

ニーチェ「おお、それでいいんじゃ。頼もしいのう。」

ジョバンニ「ニーチェ先生、それでは、ぼくたちの、ほんとうの、ほんとうのちちははは、どこにいますのしょうか？」

ニーチェ「カーツツ！ 喝ツ！ たわけめ！ 父母未生以前の面目を知れ！ このやつこめ！ 海は荒れている。一切は海の中にある。さらばじゃ、行くがいい！ 吾が息子と娘と異人たちよ！」

② 空海

鯉太郎「ああ、おどろいた。何だったんだ、あれは。おれたち、どこに迷い込んだんだろ？」

クイア「地獄の一丁目。ハーデイスのアゴラ、冥界広場だよ。みんな、ここがどこにつながっているかわからないけど、この宇宙は多元多様で、穴ぼこだらけ。季節風次第でどこにでも時空誘導されるので気をつけよう。」

空海（僧形の初老の姿で上手から登場）「おお。かつての仮名乞児のように道を求める若者たちよ。こちらに來たれ。わたしは日の本に密教をもたらし空海という僧侶だ。」

ジョバンニ「えっ、あの、あの、あなたが、あの有名な弘法大師空海僧都様ですか？」

空海「そうじゃ。わたしが空海じゃ。」

ジョバンニ「恐れながら、わが師日蓮大聖人も一目置いて灌頂を受けた真言密法の伝道師空海僧都にお訪ね申し上げます。ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのちちははを探している者です。どうか、ご教示ください。かの『三教指帰』や『秘藏宝鍵』を解き明かした明晰にして神秘不可思議なその知能をもって。」

空海「今どき珍しい礼を心得ておる若者じゃな。それ仏法は遙かにあらず、心中にしてすなわち深し。父母の恩も海より深し、山より高し、じゃが、ほんとうの、ほんとうのちちはとは、胎藏界の曼荼羅と、金剛界の曼荼羅の主たるマハー・ヴァイロチャナ、大毘盧遮那仏、すなわち、すべての根源、大元である大日如来のことじゃ。これこそ、真の父母なり！ よくぞ、問うたな。若者たちよ。」

ジョバンニ「では、その大日如来の父母は何者でしょう？」

空海「う、うちゅう、宇宙そのものじゃ。」

ジョバンニ「その宇宙の生みの親を知りたいのです。弘法大師空海様、どうかその真の父母をお教えください。」

空海「不生不滅、不増不減、色即是空、空即是色・・・悠々たり、悠々たり、はなはだ悠々たり・・・生まれ産まれ生まれ生まれて生（しょう）の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し・・・重々帝綱、すべてはつながっておる・・・ゆえに、三密加持して、即身成仏じゃ。ふしようふめつ・・・」（ぶつぶつ言いながら下手に去ってゆく）

③ 番場の忠太郎

都留女「何言ってるんだろ？ ぼくたちをけむに巻いてさあ。ちんぷんかんぷん。ちちんぷいぷいだよ。」

ルリア「すべては、ざれごと。言語明瞭意味不明だよ。」

ジョバンニ「ぼくは、先生に言われたんだ。ほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまがおわすって。弘法大師空海様は、ほんとうの、ほんとうのちちははって、そのほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまだよって、言いたかったんじゃないかなあ。」

鯉太郎「ジョバンニ、おまえはほんと、物分かりがよすぎるよ。そんなに、物分かりして、どうするんだよ。おれたち、わからないから、たずねあるいているんじゃないか。そんな、中途半端にわかってもらっちゃ困るな。こんなにやく問答なんかに納得してちゃ、だめだよ。」

ジョバンニ（すなおに）「ごめん、鯉太郎。ぼく、きまじめなんだ。そんな灘の木一本のような自分を変えたいんだ。」

番場の忠太郎（突然登場）「ごめんなすって。ごめんなすって。ごめんなすって。赤城の山も今夜限り。赤城の山も今夜限り。生れ故郷の国定村や、縄張りを捨て、国を捨て、可愛い子分の手めえたちとも、別れ別れになる首

途（かどで）だ。・・・あれつ、こりや、国定の忠治親分の名セリフだつぺ。ごめんチャイ！」

都留女「今度は、心機一転、起承転結、凄い転換だな。くだけすぎだよ、こりや。」

鯉太郎「あなたさまは、何者ですか？」

番場の忠太郎「えっ、ああ、おれっ？ おれのこと？ おれはさあ、正真正銘、生国不明、父母不明の永遠の旅がらす、番場の忠太郎つてあゝ、おれさまのことだわいなあゝ。」

鯉太郎「聞いたことねえな。番場の忠太郎、なんて。」

ジョバンニ「ぼく、知ってるよ。たしか、長谷川伸原作で、大ヒットした『瞼の母』の主人公だよ。」

番場の忠太郎「（できるだけ滑稽に）ピンポーン！ そのとおり！ そうです、わたしやゝ、その番場の忠太郎でございます。瞼の母を探し求めて、諸国一軒の僧のように、孤独なマラソンランナーのアスリートのように、ストイックに母を探し求める旅を続けている一匹の旅鳥にござんす。よくぞ、聞いてくださりました。」

鯉太郎「ジョバンニ、おまえはほんと、何でもよく知ってるな。すげえよ。」

ジョバンニ「番場の忠太郎親分、どうか教えてください。あなたが探し求めている瞼の母は、ほんとうの、ほんとうの母なのでしょうか？」

番場の忠太郎「よくぞ、聞いてくれたわいのう。問題はそこ、それなのさ。ザット・イズ・ザ・クエスチョン。」

ジョバンニ「番場の忠太郎様、その答えは？」

番場の忠太郎「そうさな。そうだよ。そうなんだよ（自分ひとりだけ納得しつつ）。おりやゝ、ほんとうの、ほんとうのおっかさんを探し求めて、何千里。回国行者の旅を続けたさ。そしてどこに行っても、これがまことのおっかさんにちがいねえ、と思って、今度はかりはと思って「おっかさん！」と呼んでも、呼んでも、ごんでも、あつ、もとい、ふりかえってくりやしねえ。ほんとうの、ほんとうのおっかさんなんて、いやしねえのさ。おま

えさん。ジンセイ、棒に振るなよ。おれのように。むだなおつかさん探しの旅なんぞ、やめちめえ。ほんとうの、ほんとうのおつかさんなんて、どこにもいやしねえ。両の脛を閉じれば、ほんとうの、ほんとうのなつかしいおつかさんの面影が浮かんでくるのさ。それだけは、否定できねえよ。うん、否定できない。いくら、自己肯定感のうすいおれでも。」

番場の忠太郎「泥の鳥ブルース」（を絶唱する）

「泥の鳥ブルース」

〱身を切るような鋭さを自分に向ける

身を断つような悲しさに我を失う

俺にかまうな 捨て置き あめつちよ

遠さにあこがれる自分にあきれる

近くにいる君を傷つける自分を恥じる

俺は荒ぶる泥の神 ちちははよ

生れてきてから愛されたことがない

死のうとしても死ねない自分を哄う

俺は飛べない泥の鳥　しらとりよ

恋をしても飛べない自分を呪う

怒りの火山に身をゆだねて死にたい

俺は廃墟のガラクタだ　富士やまよ

生れてきてから自分を壊したことがない

一度たりと自分を越えたことがない

俺は飛びたい泥の鳥　始祖鳥よ

生れてきてから自分を壊したことがない

生れてきてから愛されたことがない

A h u A h u

鯉太郎と全員「ありがとうございます。番場の忠太郎さん。あなたの答えが、一番、心に響きました。よくわかりましたが、もう一回だけ、セカンドオピニオンを求めたいと思います。」（と言って、少年少女探偵団は去っていく）。

（一人取り残されて）番場の忠太郎「赤城の山も今夜限り・・・さみしいなあ。つらいなあ。ぼっちのおれは・・・
国定の忠治親分、このどうしよもない、やさぐれのおれをひろってくだうチャイ！　ちやいちやい、ありや、ち

やいなちやいな。」(と、踊りながら、上手に消える)

④ おつる (阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」)

ジヨバンニ「ぼくたちの旅は、無駄なのか、徒労なのかな？」

ルリア「あきらめるのか、ジヨバンニ。ぼくはまだあきらめねえ。」

おつる (そこに鈴をチリンチリンと鳴らし、「子を産めるその父母の恩山寺 訪ひがたきことはあらじな」と四国遍路第十八番札所恩山寺のご詠歌を詠いながら登場)「あゝれ、ゝととさんの名は阿波の十郎兵衛(じゅうろべえ)、かかさんの名はお弓と申します。」

ルリア「子どもじゃないか。おまえはだれ? 何者?」

おつる「わらわは、阿波のおつるともうします。ととさんとかかさんを探しに、摂津の国の大阪にいと聞いて、阿波の国から海を渡って、巡礼姿でととさんとかかさんを探しに來たのでございます。わらわと同じ年の子どもはみな、家にいて、ととさんとかかさんと一緒にしあわせに暮らしています。でも、わらわにはそんな(キリリとして)スイートホームもハッピーファミリーも、ナツシングエルス、なんにもないのでござります。わらわはまだ年端もゆかぬ子どもでございます。ととさんとかかさんを探しているのでござります。」

ルリアと都留女(がらにもなくやさしげに)「見つかるといいね。」

おつる「おなさけ、ありがとうござりまする。(しおらしく) わらわは旅をつづけまする。」

ルリアと都留女「おう。道中、気をつけるんだよ。」

（おつる、「南無文殊三世の仏の母ときく 我も子なれば乳こそほしけれ」と第三十一番札所竹林寺のご詠歌を詠いながらしずしずと上手に去ってゆく）

ジヨバンニ「ああ、悲しい話だなあ。おつるは、有名な阿波の人形浄瑠璃で、近松半二原作「傾城（けいせい）阿波鳴門」第八番巡礼歌の主人公なんだよ。巡礼者の姿で阿波を出て大阪に行ったんだけど、ほんとうのはには突き返されて、ほんとうのうちに殺されるといふ最悪の悲劇のヒロインなんだ。とても、つらい話で、江戸時代は大ヒットしたんだよ。」

全員「そうなんだ。」（とつくづく感心する）

都留女「そんな話を聞くと、なえちゃんなあ。ぼくたちのほんとうの、ほんとうのはちち探しの旅も空しくなっちゃう。」

（舞台奥の方で、ひそやかに）

イザナミ・イザナギ「子どもたちよ、悲観するでない。おまえたちは、何にもまちがつとらん。ほんとうの、ほんとうのはちちは、いるのじゃ。おまえたちのこころのうちに。たましいのなかに。まぶたのおくに。」

イザナミ（突然歌いだす）「へ思い出してごらん。五つのころを。（中島みゆき「五才の頃」）そうじゃ。三つ子の魂百まで、ということわざも日の本には生まれてきたぞ。」

⑤ マッチ売りの少女、こと、実はもつきり屋の少女コバヤシチヨジ

（マツチ売りの少女、下手から登場）

マツチ売りの少女じつはもつきり屋の少女「寒い寒い大みそかの雪がしんと降り積もる夜、わたしは、とぼとぼと寒風の中を歩いているうちに、馬車にはねられそうになって、大切な木靴を失くしてしまいました。足は凍るように冷たく、おなかもすいて、ひもじい、さびしい思いに泣きそうになっていました。

どの家の窓にも明かりがあかあかとついていて、おながグウとなりそうながチヨウの丸焼きのにおいがします。そっかあ、今日は大みそかなんだ。でも、わたしには、帰る家はありません。わたしはみなし児、家なき児。寒さをしのいで、売れ残ったマツチを擦って少しでも両手やからだをあたためているうちに、そのマツチもなくなってしまう、とうとう死んでしまったのでした。」

全員「知ってる！ マツチ売りの少女だ！」

マツチ売りの少女じつはもつきり屋の少女「そう！ わたしはマツチ売りの少女。でも、もつきり屋の少女でもあるの。」

ジヨバンニ（だけが）「知ってる！ つげ義春の名作漫画「もつきり屋の少女」の主人公コバヤシチヨジだ。」

コバヤシチヨジ「そう。おら、コバヤシチヨジ。むげいのおどつつあは、きぐしねくてやんだ、おら。」（向かいの家のお父さんはものの道理が分からなくて私はいやだ）おらは、みじめ、です。せつない、です。コバヤシチヨジは赤い靴が欲しいです。でも、それを買うにはお金が要ります。そのために、おら、乳首をさわらせるのです。みんな、頑張れちよじ、頑張れちよじ、チヨジ、と応援してくれるっけど、いつも五分も我慢することができず、お金をもらえないのっす。おら、みじめです。せつないっす。死にたいっす。」

ジヨバンニ「チヨジ、ぼくはがんばれ、とは言わないよ。言えないよ。チヨジ、そこから逃げよう。ぼくたちといっしょに、ほんとうの、ほんとうのはちちを探しに行こう！」

コバヤシチヨジ「おら、みじめっす。せつないっす。しにたいっす。でも、おら、おめえについていくっす。」
少年少女探偵団全員「いっしょに行こう！」

（コバヤシチヨジを含む少年少女探偵団全員が「銀河鉄道の夜」の最後のフレーズを一緒に歌う）

「あの空の果てまで ぼくたちみんなで

まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう 探しにゆこう

⑥ デロリンマン

デロリンマン「みんな、聞いてくれ。この冥界の十字路、ハーデイスの広場で。おれは、デロリンマン。むかし、三四郎と名乗っていた。だが、自殺未遂をしたために、こんな顔になっちゃって。

だからこそ、おれはデロリンマンとなって、人間を救うのだ。ボロボロのマントをひるがえし、赤フン一丁で街を歩いて、おれは神だ、魂のふるさとだ、と言って回ったが、妻のママ子にも、息子の四郎にさえも、邪険にされて追い返されて、嘲笑われた。

けれども、おれはへこたれない。くじけない。めげない。何度踏みにじられても、踏みにじられても、また立ち上がるのだ。そして、愛と正義の世の中をつくるのだ。オロカメンや紅トカゲにバカにされ、攻撃されても、何度も何度も殺されそうになっても、おれは立ち上がる。おれはよみがえる。おれはめげない。おれはくじけな

い。おれはデロリンフンドシ族」

(ギンギンのエレキが鳴り響き、赤フン一丁でデアロリンマンが「フンドシ族ロック」を絶叫する)

「ふんどし族ロック」

へおまえのフンドシ 赤フンか 空を飛んでゆけ

おれのフンドシ 青フンよ 海を越えてゆけ

いつまでたっても おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

おまえのフンドシ 金フンか ビルを抜けてゆけ

おれのフンドシ 白フンよ 巷を泳いでゆけ

自由を愛する おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

気が気でねえよ おれたちは

ジリ貧民族 少数民族 マイノリティ フンフンフン族 フンドシ族

言わずと知れた おれたちは フンフンフンドシ族

言挙げしないが おれたちは フンフンフンドシ族

この世の悪に 立ち向かう フンフンフン族 フンドシ族

おれたちや 敵に立ち向かう パンツ・グローバリゼーション

世界にや 多様性が必要よ アンチ・ファンダメンタリズム

自由を愛する おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

誇りを持つとうぜ おれたちは

尻貧民族 少数民族 マイノリティ

フンフンフン族 フンドシ族

あ フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフンドシ族

⑦ 宮沢賢治

「フンドシ族ロック」の余韻に浸り、首をフリフリしながら登場してくる宮沢賢治。

宮沢賢治「そう。フンドスの君よ。わだぐすはへこたれそうになって、立ち上がるために、『春と修羅』と『注文の多い料理店』を書き上げて自費出版したのす。千部も、だなす。だども、十冊も売れなかつたな、のす。稗貫農学校の生徒たちも、ちんぷんかんぷんと言つた、のす。そこで、わだぐすは「虔十公園林」をつくつたのす。」

ジヨバンニ「あつ、ケンジにいちゃん！　ぼくの生みの親。ぼくの、アバターお父さん、かな？　でも、ほんとうの、ほんとうのお父さんかもしれない。」

宮沢賢治「わだぐすめは、みんなに笑われ、石を投げつけられてもぐじけない、へこたれない、めげないデロリンマンに、度十とデクノボーとおなじたましいを感じるのす。

からだはうそをつかない。

が、こころはうそをつく。

しかし、たましいはうそをつけない。

宮沢賢治と少年少女探偵団が交互に群読

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしたかたないということを、わたくしはそのとおり書いたまです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

（途中からみんなで合唱）けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたり幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。（『注文の多い料理店』序）

宮沢賢治「わだぐすはいのります。ねがいます。ほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまに。いのります。ねがいます。ささげます。」

ジヨバンニ「すきとおったほんとうのたべものって、ほんとうの、ほんとうのはとちちのことですね？ ケン
ジおっとうっ！」

宮沢賢治「農民芸術概論綱要」序

「おれたちはみな農民である　ずるぶん忙がしく仕事もつらい
もつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あつた

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である」

ジョバンニ「われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である」

全員で「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である」

全員で「君の名を呼べば」と「神ながらたまちはへませ」を絶唱する。

「君の名を呼べば」

へああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ

君の名を呼べば　君の名を呼べば

君の名を呼べば　君の名を呼べば

打たれて　雨（アーメン）

ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ

君の名を呼べば　君の名を呼べば

君の名を呼べば　君の名を呼べば

どしゃぶり　雨（アーメン）

南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

のうまくさまんだばーだらだんせんだんまかろしゃだそわたやうんたらたかんまん
おんあぼきやべいろしゃのうまかばだだまにはんどまじんばらはらばりたやうん

のうぼうあかしやきやらばやおんありきやまりぼりそわか

オンアミリタテイセイカラウン オンアミリタテイセイカラウン (3回)

オンソラソバテイエイソワカ オンソラソバテイエイソワカ (3回)

南無神変大菩薩 南無神変大菩薩 (3回)

南無大師遍照金剛 南無大師遍照金剛 (3回)

南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人 (3回)

オンマニペメフーム オンマニペメフーム オンマニペメフーム (4回)

クリエ・エレイソン クリエ・エレイソン クリエ・エレイソン (4回)

アラール・アクバル アラール・アクバル アラール・アクバル (4回)

神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ (4回)

ギャーテイ ギャーテイ ハラギャーテイ ハラソウギャーテイ ボウジーソワカ 般若心経

ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば

君の名を呼べば 君の名を呼べば

どしやぶり 愛(会い、合い)

「神ながらたまちはへませ」

へ神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

岩陰より滲み出して来る 水を探して 夢を探して

向こう岸に渡る 向こう岸に渡る

夢を開いて 夢よ開けと

あはれあはれ はへ あはれあはれ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

なけなしの夢が壊れて 行く当てもなく流離う

尽十方未来際 尽十方未来際

夢を開いて 夢よ開けと

天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

祈りの言葉は死に絶えても 朝日の中で甦り咲く

尽十方未来際 尽十方未来際

夢を開いて 夢よ開けと

天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら

宮沢賢治「尽十方未来際まで、銀河系を意識して、生き抜くのだった。わだぐすたちの最後の祈りと願いを結集して。求め続けるのっす。」

クイア「しゃーないなあ。みんな、生真面目すぎて。もっともっと奇妙な世界を持つてるのさ。この世界は。宇宙は。いづれ、まもなく、きつと、そんな奇妙な大変動と大変身がやってくるさ。そして、ぼくたちの夢に近づいていくさ。」

イザナミ（涙に掻き暮れながら）「イザナギよ、けなげじゃ。けなげじゃのう。青人草のニンゲンは。われらの子

孫は、安泰じゃ。大丈夫じゃ。」

イザナギ「そうじゃのう。大丈夫のようじゃのう。」

（と、突然、雷鳴がとどろき、稲光が点滅し、大地震と大津波と火山の大噴火と山崩れが同時に起こり、壊滅的な破壊に見舞われ、すべてがなぎ倒され、絶滅する。あとには、ニンゲンも、草木一本も、いのちのひとかけらも、残っていない（ように見える）。）

みなさん天気は死にました

こころの準備はいいですか？

からだの準備もできてます？

たましいの準備はいかがです？

みなさん天気は死にました

でも、死んだとはいえ天気はありまする

狂天慟地の天気ではありますが

前人未到把握不能のお天気ですが

みなさん天気は死にました

どうして天気は死んだのか？

だれもほんとうの答えはわかりません
でもだれもがうすうすわかっています

みなさん天気は死にました

曇りのち晴れとか晴れのち雨とか

天気予報官も上がった

天気に振り回されることもなく

みなさん天気は死にました

むかしむかしそのむかし

秦の始皇帝の時代に天気予報官が現われて

皇帝様に天の気を伝えました

よしよしおまえは愛い奴じゃ

天気の一つも飼ってみる

俺の意思を天に伝えて天命としろ

そこから天気への脅迫が始まりました

みなさん天気は死にました

秦の始皇帝ばかりではありません

あらゆる時代のあらゆる為政者は

天気のことを気にはしながら天気を憎みました

思い通りにならないものすごろくの賽賀茂川の水僧兵

いや一番思い通りにならないものは 天気のところでございます

みなさん天気は死にました

天気のことをだれもがわからず

天気のところはだれもが通ぜず

天気はしだいにくるって孤独死してしまったのであります

みなさん天気は死にました

誰にも何処にもまんべんに

いろいろ気配り天配り

配りすぎて疲れ果て

どうするすべもないままに

みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました

葬儀を行う人はいませんか？

どんな葬式必要ですか？

いのりいのりいのりです

みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました

ナポレオンもヒトラーも豊臣秀吉も侵略できなかったもの

それが天気だったのに

どうしたことか あろうことか

みなさん天気は死にました

悲しみに満ちた追悼メッセージ

不安にあふれた警告メッセージ

怖ろしいばかりの脅迫メッセージ

そのどれもがどうすることもできない不可能性のトーン

みなさん天気は死にました

天気予報がなつかしい

ああ天気よ天気帰って来ておくれ

みなさん天気は死にました

曇りも晴れも雨も雪も台風もない

みなさん天気は死にました
ぼく^らもともに死にましよう
ぼく^らもすべなく死にましようか

みなさん天気は死にました
でも 死んでも終わりではありません
死んで花実が咲くものか と言いますが
死んで花実も咲きまする

みなさん天気は死にました
でも 死んだあとは よみがえるだけ
あとは 野と成り 山と成る

みなさん天気は生まれます
みなさん天気は阿礼まする
みなさん天気に生まれませ

深い夜の瞳の底でアンテナは疼いた。音信絶対不能の音源を逆探知したが事切れてしまった悲劇的な預言者を弔う。耳孔の奥でトマトが潰れマグネシウムの閃光が散らばった。神父は手旗信号を使って必死の面持ちで十字を切ったが誰も気にせず通り過ぎた。夜空を染める無関心と迸る涙のような流星。帰って来い。暗号解読が遅れたため避雷針が裂けて粉々に碎けた。もう一步も先に進めない。三步退いて倒立したまま巫女は緋袴を翻して昏睡した。懐かしさこそ誘惑の手口なのに。忘れるな。未来を覗く窓が指揮棒で激しく割られていた。空に向かって牛乳を撒き散らした。ハレルヤを叫びながら白色驟雨に撃たれ南十字星に内臓を鷲掴みされたまま遠くの遠くまで嘆きの河を渡って往く。その日始祖鳥は翔ぶ空を切なく探した。

「メコン」

メコン

棚の上の骨壺を抱いて 夕焼けの散華の海に入る
人知れず葬りの蛾 矢板の上に意気消沈した雪だるまが 悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ 誰にも見られず 何人にも咎められず
靴下を履いたまま飛び込んだ おまえの胸に

メコンよ

防ぎようもない空と 喘ぎ見るばかりの おまえの喉元
ぬめりと流れてゆく舌先を 衝立は途絶えた

メコンよ

何というなつかしさの奥に

蜜蜂がつつき合つて 互いを刺し殺す現場を

生まれたばかりの 二日月の生卵 割れぬまま呑み込んだ おまえの度量
いくばかり いかばかりかと 捨て石に訊く 死後の生存を

名ばかりの孤独に 唯名論者は躓く

明日を信じないくせに 明日を待ち望む偽善者よ

サントペテルブルグまで 日傘をさして

揺籃の扉 消え果てし秀妻 海鮮問屋の蛸と消ゆ うつばりの夜汽車で

さあ ひらいて おまえのまたを

ちのはてまでつづく あめのやちまた

だが ちまたには 季節外れの雪が 降っていた
熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも 狂天慟地の風上がる
だがたとえ 天地がひっくり返っても

あめつちをつなぐ母なる河として

あなたは 流れつづける

この世の果てまで

地の涯てまでも

この世の果てまで 地の涯てまでも

この世の果てまで 地の涯てまでも！

「いのちのうた」(全員で静かに合唱。次第に盛り上がっていく)

へ死にゆくもの 生まれいづるもの

ともに刻む いのちのうた

生まれいづるもの 死にゆくもの
ともに歌う いのちのうた

振りかえっても 届かない
仰ぎ見ても 見わたせない

思い出す ふるさと

もとはじめの聲が ひびく

やさしさ うつくしさ いのりのふかさ

気づかなかったよ 大妣よ

あなたのいのりと ねがい

やさしさ うつくしさ ねがいのふかさ

気づかなかったよ 大妣（おおはは）よ

あなたのいのりとねがい

やさしさ うつくしさ いのりのふかさ

やさしさ うつくしさ ねがいのふかさ
やさしさ うつくしさ いのりのふかさ
やさしさ うつくしさ ねがいのふかさ

いのり ねがい いのちの深さ
いのり ねがい いのちの遠さ
いのり ねがい いのちのうた

執筆者紹介

小泉友美（カトリック神学者、作家）

江尻潔（詩人、足利市立美術館学芸次長）

津城寛文・匡徹（筑波大学名誉教授・宗教学者）

日守麟伍（歌人、本名：津城寛文）

永井敦子（上智大学副学長・フランス文学者）

鶴岡賀雄（東京大学名誉教授・宗教学者）

鎌田東二（京都大学名誉教授・ガン遊詩人）

深澤英隆（一橋大学名誉教授・宗教学者）

勝又公仁彦（京都芸術大学教授・写真家・表紙写真2作品及び短歌）

同人誌 あごら Agora 第1号
2024年7月7日 ヘルダーリン研究会発行
編集発行人代表 鎌田東二

